Water in the Tantric Buddhist Rituals in India

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000026

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

インド密教儀礼における水

森　　雅　秀*

Water in the Tantric Buddhist Rituals in India

Masahide MORI

Indian Tantric Buddhist ritual contains a water-offering ritual to the deities. This water-offering ritual is also performed as a part of the *abhiṣeka* ceremony and the *homa* ritual. Abhayākaragupta (11c–12c) describes this ritual elaborately in his famous ritual compendium, the *Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā*, and in his *homa* treatise, the *Jyotirmañjarī*. Similar descriptions can be found in Jagaddarpana's *Vajrācāryakriyāsamuccaya*. This article outlines the water-offering ritual mainly on the basis of these works and studies its characteristics.

The water offered to the deities is of four kinds, viz., *arghya* (water offered at the reception of an honoured guest), *pādya* (water for washing the feet), *ācamana* (water for sipping) and *prokṣana* (water for sprinkling). Abhayākaragupta and Jagaddarpana describe the materials for the water vessels, the substances added to the water, the position of the vessels, the method of offering each kind of water and the *mantras* recited during the offering. Abhayākaragupta also mentions some variant opinions about the order of the water-offering and the body parts of the deities to which the four kinds of water are offered.

Two points are of special importance in this ritual. 1) Only *three* vessels are used for *four* kinds of water, since one vessel is used for both *ācamana* and *prokṣana*. 2) The water jar called '*sarvakṛtkalaśa* (jar for all purposes)' contains water which is not offered to the deity, but sprinkled on the performer and the ritual implements.

The water-offering ritual has its origin in the ceremonial reception of special guests already described in the Gṛhyasūtras,

* 名古屋大学，国立民族学博物館共同研究員

and its counterpart can be found in the *pūjā* ritual (worship service) performed in Hinduism. Three kinds of water, *arghya*, *pādya* and *ācamana*, are offered at the reception of a guest and in the *pūjā*. The *prokṣana* water is sprinkled not on the deity, but on the performer and the ritual implements. The *ācamana* water is offered to the deities for sipping and is also sipped by the performer.

The water used in these rituals is of two types, water for offering to the deities and water for the performer's purification. *Arghya* and *pādya* belong to the former type and *prokṣana* originally forms part of the latter type. *Ācamana* belongs to both types.

While in Hindu ritual the act of *prokṣana* refers to sprinkling water on the performer, in the water-offering ritual described by Abhayākaragupta and Jagaddarpana, *prokṣana* refers to the water sprinkled on the deity, and for this purpose water from the *ācamana* vessel is used. Sprinkling water on the performer is called *abhyukṣana* and is performed with water from the *sarvakṛtkalaśa*. The *prokṣana* water is offered along with three other kinds of water. However, there is no separate vessel for *prokṣana*, and the water in the *ācamana* vessel is used.

1. はじめに
2. 資料の記述
3. 考察
4. おわりに

1. はじめに

インド仏教では7，8世紀ごろからタントリズム，いわゆる密教の時代がはじまる。もともと，儀礼の排除につとめてきた仏教も，密教の時代にはインドの他の諸宗教，とくにヒンドゥー教にならって，独自の儀礼体系をつくりあげていった。インドにおいて仏教の儀礼体系が整備されていく過程は，仏教の神秘主義的傾向の増大，すなわち密教化に一致している。

密教儀礼のもっとも基本的なものに，尊像（イコン）に対する礼拝や供養をあげることができる。礼拝の対象であるこれらの尊像が当時さかんに制作されたことは，今日，この時代の僧院跡から発掘される，おびただしい数の造型作品からもうかがわれる。また，礼拝や供養の対象には，これらの現実の尊像ばかりではなく，瞑想上の神がみ（尊格）も含まれる。これには，神がみのすがたをありありと思い浮かべる，観

想法，あるいは成就法とよばれる，密教独自の修行法の流行があった。対象がいずれの場合であっても，礼拝や供養を行う者は，これに対して花や灯明などさまざまな供物を供える。このような供物のひとつとして水があげられる。当時の文献によれば，供物としての水には独特の名称があたえられ，供える手順や所作，用いられる道具などが詳細に規定されていた。本稿では，水が供物として用いられる礼拝や供養を「水の儀礼」とよぶことにし，水の儀礼を説く12世紀ごろのサンスクリット文献をもとにして，密教儀礼における水の位置や役割を検討してみたい。

代表的な密教儀礼には，弟子の加入儀礼であるアビシェーカ (abhiṣeka; 灌頂) や，日本でも護摩の名で知られるホーマ (homa) がある。アビシェーカにはマンダラ (maṇḍala; 曼荼羅) が儀礼の装置として必要であり，マンダラの制作じたいも儀式の一部にくみこまれている。水の儀礼は，さまざまな密教儀礼の一部としてひんぱんに登場するにもかかわらず，アビシェーカなど比較的よく知られているこれらの儀礼にくらべて，従来ほとんど注目されることがなかった儀礼である。これは，水の儀礼が密教の儀礼体系の中心的位置を占めることがなく，むしろ，準備段階での儀礼とみなされてきたことによるためであろう。たしかに，ここでのちほどとりあげる文献の中でも水の儀礼はアビシェーカやホーマなどの一部にすぎず，予備的な位置におかれている。しかし，さまざまな儀礼や儀式にくみこまれる水の儀礼は，密教儀礼を構成する基本的なユニットのひとつとよぶことができる。

インドに限らず，水は宗教や儀礼に密接に結びついてきた物質のひとつである。人類にとってもっとも身近な物質であるともいえる水に対して，人びとはさまざまなイメージを託し，象徴的な意味を読みとってきた。水のもつこのようなイメージとして，フリース (Vries) はつぎのようなものをあげる。1) 混沌（水はすべての物質の起源であり，生命を与える），2) 洗礼（再生，新生をもたらす），3) 推移（気体と固体，あるいは生と死の中間をあらわす），4) 溶解（あらゆる物質は水の中で溶解する），5) 浄化（けがれを浄める）など [フリース　1984: 678]。これらの各項の順序や優劣は地域や時代によって変化はあるが（フリース自身はおもにキリスト教を念頭においている），われわれのもつ水のイメージはほぼ含まれているといってよいであろう。

エリアーデ (Eliade) は，彼独自の宗教学概論の中で水のシンボリズムを論じるにあたり，いかなる宗教的な枠組においても水のもつ機能はつねに同じであると述べ，「水は形を解体し，廃棄し，罪を洗い清める——清めると同時に再生させる」[エリアーデ　1974: 92] と要約している。これは，フリースのあげる水に関するさまざまな

イメージが，宗教や神話の枠組の中ではつねに有機的な連関をもってあらわれてくることを示唆している。

宗教において水のもつ重要性はインドにおいても何らかわりはない[1)]。『リグ・ヴェーダ』を残したアーリヤ人にとって水は特別な位置を占めていたことが同書からはうかがわれる。水の神格化である女神アーパスへの賛歌には，水のもつ浄化，再生，治癒力を読みとることができる。『リグ・ヴェーダ』中でもっとも人気の高い神インドラは，ブリトラを殺りくし，水を解放したことが何度もくりかえして称賛される。これは宇宙の秩序の回復とみるのが一般的である [辻　1967: 48]。インドラについで賛歌の多いアグニは，祭式の火などとして顕現するまでは水の中にとどまっている。至高神にして司法神であるヴァルナは，もともと水との結びつきが強い神であったが，時代が下るにつれて水の神としての性格がいっそう顕著になる。

祭式に目をむけた場合も同様である。たとえば，供犠において窒息させられた犠牲獣は，祭主の妻によって水を「飲まされる」。この行為には浄めや鎮痛などさまざまな解釈がなされてきたが，そのひとつに，水は生命の気息であるため，これによって犠牲獣は気息をとりもどし，神がみの不死の食べ物になるというものがある [モース他　1983: 48, 154]。あるいは，結婚式のような場面でも水は儀式の重要な装置のひとつとなる。儀式のクライマックスで，花婿は花嫁の手をとり，聖火のまわりを三回右まわりに回る。この時，聖火のそばには水瓶に入った聖水が必ず置かれていなくてはならない [Gonda　1977: 558–559; 風間　1990: 223]。

仏教では水はどのようにあつかわれてきたであろうか。片山 [1987] は「献水」(Pāli: dakkhiṇodaka) という語に注目し，初期仏教において儀礼的に用いられた水について論じている。彼によれば，浄化，再生などの水のもつ象徴的機能をたてまえとしては否定した初期仏教においても，パーリ語聖典やその註釈書であるアッタカター文献の中に儀礼的な水，すなわち献水を見出すことができる。パーリ文献には「献水」という語はあらわれないが，その先駆的な存在として，布施が行われる時に施物に先だって施者から受者に捧げられ注がれる水がある。アッタカター文献では，このような水が献水の名でよばれるようになる。献水には三つのタイプがある。第一は，比丘個人が托鉢せず集団（サンガ）が施物を受ける場合に，施物に先だって捧げられる献水である。第二に，精舎や精舎のための土地などが寄進される場合，その前に献水が行われる。第三に，比丘によって死霊や親族霊に施される水が献水とよばれる。このうちはじめのふたつのタイプでは寄進者とサンガ，最後の例では比丘と死霊等と

1) インドの宗教における水の意義については Crook [1921] 参照。

いうちがいはあるが，いずれも水は捧げられるものとしてあつかわれている。これらの伝統は上座部仏教の中で受けつがれていった。

一方，北伝の大乗仏教において水がもっていた意義については，後に述べる図像表現を除いて筆者は特別な知見を有しない。大乗仏教においては，仏塔 (stūpa) やチャィトヤ (caitya) に対する礼拝や供養が一般の信者にとっての重要な信仰形態であったと考えられるが，礼拝の時に捧げられる供物の中には水は含まれない [杉本　1984: 174]。

密教と水については[2)]，すでにふれた代表的な密教儀礼であるアビシェーカを，水を用いた儀礼としてあげておかなければならない。インド後期密教では，アビシェーカはいくつものプロセスから構成される複合的な儀式となったが，その中核のひとつは，弟子が師から水瓶の水を灌がれる部分にある。「アビシェーカ」は abhi√sic すなわち「水をそそぐ」という意味の動詞から派生した語で，漢訳テキストでは「灌頂」と訳される。洗礼をはじめとして，入門者に水を注ぐ儀式は加入儀礼としてもっとも一般的なもののひとつで，水のもつ浄化と再生の機能に根ざしている。

造型作品に目を転じると，水はここでも豊富なシンボリズムをそなえていたことがわかる。バールフトのストゥーパの欄楯装飾には「満瓶」(pūrṇaghaṭa) とよばれる，水で満たされた瓶から蓮華の生えるモティーフがくりかえしあらわされている。サーンチーにみられる「象の灌水をうける女神」や「蓮華文様」とともに，水のそなえる豊穣性が意識されていたと考えられる [宮治　1981: 29]。水中から生じる蓮華や水の入った瓶は，仏教徒たちのもっとも好んだイメージである。いずれも，彼らにとってなじみ深い菩薩である観音（観自在）のアトリビュート（持物）となり，時代や地域をこえて生きつづけた。図像表現として好まれたモティーフである海獣マカラや龍神ナーガも水と密接に結びついたものたちである。

水に関するこのようなインド的なコンテキストをふまえたうえで，インド密教における水の儀礼についてその概略をながめてみよう。

2. 資料の記述

水の儀礼に言及する密教文献は少なくないが，本稿では比較的内容の詳しい以下の3点をとりあげて記述を行う。

2) 密教と水については松長 [1988] 参照。

1）アバヤーカラグプタ Abhayākaragupta 著『ヴァジュラーヴァリーという名のマンダラ儀軌』*Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā* (以下 VA)。

2）アバヤーカラグプタ著『ジュヨーティル・マンジャリー』*Jyotirmañjarī* (JM)。

3）ジャガッド・ダルパナ Jagaddarpaṇa 著『金剛阿闍梨所作要集』*Vajrācārya-kriyāsamuccaya* (AKS)。

1）と2）の著者であるアバヤーカラグプタはインド後期密教を代表する学僧である。ヴィクラマシーラ寺院の座主などをつとめ，その生存年代は11世紀半ばから12世紀のはじめの四半世紀に推定される [森　1991a]。アバヤーカラグプタは30点以上の著作を残し，インド仏教の最後期に大きな足跡を残したばかりではなく，のちのチベット仏教にもはかりしれない影響を与えた。

1）の VA は彼の主著のひとつで，サンスクリット語で著された広瀚な儀礼解説文献である。VA には主としてネパール系のサンスクリット写本が十数本現存し，またチベット大蔵経にはそのチベット訳テキストが含まれている [森　1991b]。しかしながら，サンスクリット・チベット語ともに校訂テキストは未発表で，翻訳もなされていない。ここでは，必要に応じてチベット訳テキストも参照しながら，サンスクリット写本を用いて内容の理解をはかる。

VA は，アビシェーカの儀式とそれに先だって行われるマンダラ制作の儀礼を主題とする。全体は儀式の進行にしたがって解説がすすめられるが，冒頭と末尾に予備的，あるいは補足的な説明がなされる。

VA は，密教図像の基本的な文献として知られる『完成せるヨーガの環』*Niṣpanna-yogāvalī* (NPY) と，つぎに述べる JM とともに，密教儀礼に関する三部作として，アバヤーカラグプタによって執筆された[3)]。このうち，NPY はマンダラの観想法をあつかい [森　1989: 235–236]，JM にはホーマの儀軌がとかれている。VA はこれらの三部作の中で中心的な位置にあり，分量も他の二著作に比べてはるかに大きい。

水の儀礼に関する解説は，VA の第二章「アルガなどを捧げる規定についての儀軌」(arghādidānalakṣaṇavidhi) においてなされている。ここにおかれたのは，マンダラの制作とアビシェーカにおいてしばしば言及される水の儀礼について，前もって細かく説明しておこうという著者の意図からであり，アバヤーカラグプタはこの規定が「後述するすべての儀軌において有効である」とはじめにことわっている。水の儀礼は，四種類の水を特定の所作によって礼拝の対象に捧げる儀礼である。四種類の水

3) チベットではこの三部作は phreng ba skor gsum（環三部）とよばれる。三作いずれも phreng ba (環)の語がチベット語タイトルに含まれるからである。Obermiller [1986: 219] 参照。

にはそれぞれ名称があり，アルガ (argha; 閼伽水)，パードヤ (pādya; 洗足水)，アーチャマナ (ācamana; 嗽口水)，プロークシャナ (prokṣaṇa; 灑浄水) とよばれる。文献によっては，アルガという語で，これらの四種類の水をすべて指すこともある。この第二章では，これらの四種類の水を入れる容器の材質にはじまり，水の中に入れる物，容器の配置，捧げる時の所作とマントラ (mantra; 真言) などがサンスクリット写本でわずか一葉たらずの中に述べられている。

つぎに 2) の JM について。JM のタイトルは VA の本文中に見出され，逆に JM も VA に言及することから，両者は平行して執筆されたと考えられる [森　1991a]。ホーマに関する解説書である同書は，実際に火炉の中に供物を供える外的なホーマ (bāhyahoma) と，精神的なホーマを述べる部分とに二分できる。このうち，前者の外的なホーマに関する部分が全体の 8 割ないし 9 割を占め，火炉，供物，燃料，道具などの解説がなされている。水の儀礼もこの部分に二箇所にわかれて登場する。はじめのところでは，水を入れる容器の材質と，ホーマの目的に応じて水の中に混ぜるものが紹介されている。あとの部分では水の具体的な捧げ方が述べられている。

JM には数種のサンスクリット写本が残されており，このうちケンブリッジ大学図書館が所蔵する写本にもとづいたサンスクリット・テキストが公表されている[4)]。

3) の AKS は，アバヤーカラグプタの三部作に同一あるいはきわめて近い内容を含むことで注目される。AKS の分量はアバヤーカラグプタの三部作をあわせたものよりも大きい。これは三部作には含まれない章が AKS にいくつかあるためである。しかし，逆に三部作にあって AKS に含まれない部分もあり，また単なる章や節，段落などの増減ばかりではなく，細部の語句の異同や記述の順序の相違もみられ，AKS と三部作との詳細な比較が今後行われなければならない。著者のダルパナ，あるいはジャガッド・ダルパナについては，チベットの歴史書『青冊史』*Deb ther sngon po* の中に伝説的な記述が残されているだけで [Roerich　1976: 1045]，詳細は不明である。

VA や JM にみられた水の儀礼に関する記述は，いずれもその対応箇所を AKS の中に見出すことができる。このうち，VA との対応箇所は，VA と同じ「アルガなどを捧げる規定に関する儀軌」という章名がつけられ，VA 中の最後の二段落が AKS に含まれないことを除けば，ほとんど同一の文章があらわれる。これに対し，JM との対応箇所では，表現形式，内容ともにいくつかの相違点が認められる。

AKS にも十本あまりのサンスクリット写本が伝えられ，ここでもそのうちのいくつかを参照した。

4) 奥山 [1984, 1986] 底本となった写本は後半部分が欠落しているが，水の儀礼に関する記述は残存部分に含まれる。

以上の三点はいずれもインド後期密教に属するサンスクリット文献であるが，本稿ではこれらに加えて，チベット人による次の文献を参照する。

4）ツォンカパ・ロサン・タクパ Tsong kha pa blo bzang grags pa 著『勝者普遍主大金剛持の道次第＜一切秘密精要の開顕＞』*rGyal ba khyab bdag rdo rje 'chang chen po'i lam gyi rim pa. "gSang ba kun gyi gnad rnam par phye ba"*。

同書は，ツォンカパ (1357–1419) によるインドおよびチベットの密教理論の集成書として『真言道次第』の名でよく知られている[5]。同書の第6章から第10章まではマンダラの制作とアビシェーカの儀礼の解説にあてられている。ツォンカパはこの部分の記述にあたって，基本的な文献に VA を用いている (TTP, vol. 161, 102, 1, 6)。

水の儀礼には第七章の末尾近くに若干のスペースをさいている。ツォンカパは水の儀礼に関する VA の記述を詳説するとともに，いくつかの関連文献に言及し，内容を敷衍している。

以上の四点の文献をもとに，インド後期密教の水の儀礼の概要をつぎに示す。なお，これらの文献について，使用した写本や版本に関するデータ，該当箇所とその原文は，本稿末尾の附録にあげた。ただし 2）の JM のサンスクリット・テキストはすでに公表されているため省略した。

a）容器の材質

VA をはじめ，いずれのテキストも，水を入れる容器の材質を規定することから，水の儀礼の解説を開始する。VA は偈頌の形でつぎのように述べる。

> 金，銀，石，銅，木，土，真珠貝，ほら貝，木の葉で作ったパードヤ・プロークシャナ・アーチャマナ・アルガの容器。

容器の材質として金以下の九種類の材料があげられている。このうち，石は自然石を加工して作った容器と考えられる。土はおそらく素焼きの器を指したのであろう。真珠貝 (mauktika; Tib. nya phyis) は必ずしもアコヤ貝に限定されず，次のほら貝に対して二枚貝の貝殻という意味で用いられたとみるのが妥当である。木の葉 (parṇa-puta) は，厳密にいえば，木の葉を丸めて漏斗状にしたものである[6]。このように，

5）同書の第1章から第4章までは高田 [1978] によって翻訳されているが，水の儀礼についての記述はここには含まれない。
6）Monier-Williams [1982] parṇaputa の項参照。

四種類の水の容器には，金や銀の金属性のものをはじめ，木や石，土から作った加工品ばかりではなく，貝殻や木の葉などの自然のものを利用することもあった。

JM にも容器を作る材料としてほぼ同一の偈があらわれる。ただし，真珠貝の原語が mauktika ではなく śukti であり，水の種類も四種類すべてをあげるのではなく，「アルガ・プロークシャナなどの容器」という表現をとる。また，これと同じ偈が AKS の中の JM との対応箇所にも登場する。

ツォンカパは『真言道次第』の中で VA の記述を引用した後，『グヒヤ・タントラ』*Guhyatantra* に類似の内容があることを指摘する[7]。同経は漢訳されており（大正蔵第18巻第897番『薩嚩耶経』）訳者の不空（704-774）の年代よりみて，遅くとも8世紀半ばには成立していたと考えられる。このことは，VA などにみられる容器の材質に関する記述が伝統的な規定であったことを予想させる。これは，水の儀礼をあつかう VA の第二章の中で，この部分だけが散文ではなく韻文で表現されていることとも無関係ではないであろう。

b）水に入れるもの

礼拝の対象に捧げられるのは水だけではない。水を主体としつつ，その中に穀物や花，香料などを含んでいる。また，これらは容器に入れられた後，特定のマントラが儀礼を行うものによってとなえられる。こうした水の内容物とマントラは，水が捧げられてから行われる儀礼の目的に応じてそれぞれ異なる。

儀礼の目的にはつぎのようなものがある。1）息災（śānti；災いや障害をとりのぞく）2）増益（puṣṭika；繁栄や幸福の増進）3）敬愛（vaśīkaraṇa；和合，親睦を祈る）4）調伏（abhicāra；怨敵や悪霊を降伏させる）5）鉤召（ākarśana；人やものをひきよせる）。他にも黒魔術的な追放（uccāṭaṇa）や呪殺（māraṇa）などもある。これらの儀礼の目的は，特にホーマが実践される時に重要になる。目的に応じてそれぞれ異なった火炉の形態，供物の種類，となえるマントラなどが規定される。とりわけはじめの四つは四種法とよばれ，そのまま基本的なホーマの種類になる。水の儀礼は必ずしもホーマの前に行われるだけではないが，水の中に入れるものが目的によっ

7）該当箇所はチベット訳テキストでは TTP, vol. 9, 47, 5, 3–4，漢訳では大正蔵第18巻，p. 766c である。ただし，同経では四種類の水の容器としてではなくアルガの容器としてこれらが規定されている。そのためツォンカパは，ドゥルジャヤチャンドラ Durjayacandra が四種類の水の総称として「アルガ」の語を用いると書いていること（TTP, vol. 56, 143, 4, 3）を根拠に，『グヒヤ・タントラ』の「アルガ」には四種類の水が含まれていると説明を加えている。なお『グヒヤ・タントラ』には，アルガの容器の材質についての規定がもう一箇所含まれるが，あげられている材料の種類はこの箇所よりも少ない（TTP, vol. 9, 46, 1, 3–4）。

て異なるという発想は，おそらくホーマからのアナロジーであろう。これについてアバヤーカラグプタは VA の中でつぎのように規定している。

> これらの容器とさらにまた別の容器に大麦，牛乳，白い花，クシャ草 (kuśa)，胡麻，米，甘露を含む白い香水を入れ，「oṃ āḥ hūṃ」というマントラと，自分の主尊のマントラと[8]，〔アムリタ〕クンダリン Amṛtakuṇḍalin（甘露軍荼梨）のマントラを七回ずつ，あるいは108回となえよ。これは息災の場合である。
> 胡麻，ヨーグルト，黄色い花，ダルバ草 (darbha)，甘露を含む黄色い香水を入れ，同じように〔マントラを〕となえよ。増益のためである。

はじめにある「これらの容器」とは，所定の材料で作られたアルガなどの容器を指し，これらの容器とは別にさらにもうひとつの容器が準備される[9]。ツォンカパは『真言道次第』の中で，これらの容器に入れられる大麦以下の七品目が「アルガの七品」(mchod yon gyi rdzas bdun) とよばれると述べている (TTP, vol. 161, 138, 3, 3)。この場合の「アルガ」は四種の水のひとつではなく，これらの総称としてのアルガを指している。七品目に含まれるクシャ草はヴェーダの祭式以来，インドの宗教儀礼でしばしば用いられてきた聖なる植物である。増益の部分であげられるダルバ草はクシャ草と同一視される場合と別の植物を指す場合とがあるが，ここではクシャ草の別称として用いられている[10]。水にむかってとなえられるマントラの中の「アムリタクンダリンのマントラ」は「すべての行為のためのマントラ」(sarvakṛtmantra あるいは sārvakarmikamantra) とよばれることもある。この場合の「すべての行為」とは「すべての儀礼行為一般」を指し[11]，アムリタクンダリンの他にもヴァジュラヤクシャ Vajrayakṣa やヴィグナーンタカ Vighnāntaka などの尊格のマントラのこともある。このマントラは儀礼の中で用いられる道具や儀礼に参加する人などに対してとなえられ，対象の浄化，除災を目的とする。アムリタクンダリンのマントラにはいくつかの伝承があり，一定しないが，アバヤーカラグプタは NPY の中で「oṃ amṛta-kuṇḍalī vighnāntaka hūṃ」というマントラを「すべての行為のためのマントラ」のひとつとしてあげている [Bhattacharyya 1972: 53]。

8) チベット訳テキストでは「自分の部族の主尊のマントラ」(rang gi rigs kyi bdag po'i sngags) である。
9) VA のチベット訳テキストでは「これらと〔さらに〕別の容器に」(de dag dang gnod gzhan du) であるのに対し，ツォンカパが『真言道次第』の中で引用する文は「これらと〔さらに〕別の適当な容器に」(de dang snod gzhan gang rung du) となっている。そのため，ツォンカパは「〔容器の〕材質として述べられた九種やさらに別のものでもよい」(dngos su smos pa dgu dang gzhan yang rung ngo) と解釈し，容器の材料の規定として理解している。
10) クシャ草とダルバ草については Gonda [1985: 29–107] に詳しい。
11)「すべての行為」については Edgerton [1977] の sarvakṛt の項参照。

VA では水の内容物に関して息災と増益の二種があげられていたにすぎないが，ホーマに関する儀軌である JM にはつぎのようにさらに四種の区分が加わる。

> これら〔の容器〕に，勝利の瓶に入った，大麦，牛乳，白い花，胡麻，クシャ草，米，甘露を含む白い香水を注ぎ，香で薫じ，自分の主尊のマントラか，あるいはすべての行為のためのマントラの最後に「svāhā」を加えたマントラを100回となえよ。これは息災の場合である。
> 増益の場合，同じように胡麻，ヨーグルト[12]，黄色い花，黄色い香水などの水に，「oṃ」を加えたマントラをとなえる。
> 愛敬の場合，赤い香水などの水に，終わりに「hoḥ」を加えたマントラをとなえる。
> おなじように，鉤召の場合，終わりに「jaḥ」を加えたマントラをとなえる。
> 降伏の場合，粗末な碗，陶製の碗や土器などの容器の中に，血，コードラヴァ (kodrava; 賤民の食べる穀物)，牛ふん，牛尿を入れ，さらに悪臭のする花，あるいはにおいのない花などを入れた水に，終わりに「phaṭ」を加えたマントラをとなえる。
> 忿怒鉤召 (krodhākarśana) の場合も同様である。
> 増益からあとのものと，すべての行為のための〔瓶〕には，いずれも香，花，胡麻，クシャ草，米，水の中で適宜入手できたものを入れよ。

「勝利の瓶」(vijayakalaśa) とよばれる容器は，各容器に分配される前の四種類の水がまとめて入れられている容器である。引用の末尾に登場する「すべての行為のための瓶」は，VA の中で「さらにまた別の容器」とよばれたものに対応している。VA でも後ほど同じ「すべての行為のための瓶」の名であらわれる。この場合の「すべての行為」も，すでに述べた「すべての行為のためのマントラ」のそれと同じ意味で用いられている。

血や牛ふんなどを含み容器の素材も異なる降伏と忿怒鉤召をのぞき，水の中に入れるものは儀礼の種類の間で大きなちがいはなく，香水や花の色のちがいによって区別されている[13]。マントラも終わりに加えられる種子マントラ (bījamantra; 単音節からなるマントラ) のちがいがあるにすぎない。

AKS では，前半の VA との対応箇所では VA とほぼ同一の内容があらわれるが，後半では JM に近い内容を伝えながらも表現がかなり異なる。形式も JM が散文であったのに対し，AKS の方は偈頌である。

> 息災の場合，そこにある牛乳と白い香などを集めて，真言行者 (mantrika) は自分の部族 (kula) のマントラの終わりに「svāhā」を加え，これを水に向かってとなえる。

12) チベット訳テキストは「胡麻の入ったヨーグルト」(til dang bcas pa'i zho) である。
13) 儀礼の目的に応じて色を変化させるという発想はホーマにおいて一般である。水の儀礼における，息災と白，増益と黄色などの対応はホーマでも共通である [Skorupski 1983a: 69, 1983b: 406–412]。インド後期密教のホーマについては頼富 [1977] 参照。

増益の場合，そこに胡麻とヨーグルトを混ぜ，黄色い香水を混ぜ，「oṃ」の語を終わりに加えた自己のマントラを水にむかってとなえる。
愛敬の場合，赤い香水などをまとめて，終わりに「hoḥ」を加えたマントラを水にとなえよ。
調伏の場合，「jaḥ」を終わりに加えた七〔音節？〕を，降伏の場合，血，牛ふん，牛尿，コードラヴァ，悪臭のする黒い香などを入れ，終わりに「phaṭ」を加えたマントラをとなえよ。
いずれの場合も，香，花，クシャ草，穀物，米，胡麻を含み，儀礼の種類に応じたものを入手できただけ水の中に入れよ。

ここでは，四種類の水のための容器とは別の容器，すなわち，JM で「すべての行為のための瓶」とよばれた容器についての言及はないが，AKS でもこれに続く段階で登場し，やはり同じ内容物を含む水をその中に入れるよう指示されている。

c）容器の位置

つぎにこれらの水や穀物などを入れた容器を置く場所が規定される。VA によればつぎのとおりである。

つぎに自分の左側に，このアルガの容器とパードヤの容器，プロークシャナとアーチャマナの容器を安置せよ。これらの容器の前には三つの小碗をおけ。

このように，これらの容器は儀礼を行う者の左側に置かれる。容器の前に置かれる小碗は，容器の水を捧げる時に，捧げる水を受けるために用いられる。ここでわれわれは奇妙なことに気がつく。水の種類は，四種類であるのに対し，それを受ける小碗は三つしか登場しない。実は，ここまでの記述では明確にされなかったが，アルガ，パードヤ，アーチャマナ，プロークシャナの四種類の水を入れた容器も四つではなく三つなのである。小碗の三つという数は容器の数に対応している。JM ではこのことが次のようにはっきり示されている。

息災、増益、愛敬，調伏の場合には，アムリタクンダリンのマントラと「hūṃ」〔というマントラ〕をとなえた水の容器（すべての行為のための瓶を指す・訳者注）と，アルガなどの三つの容器を自分の左側に置く。これらの前に三つの小碗を台 (yantraka) などの上にすえる。（傍点訳者）

水の種類が四つであるのに対し，容器の数が三つであるのは，三つのうちのひとつがアーチャマナとプロークシャナの容器を兼用するためである。これは，VA に「プロークシャナとアーチャマナの容器」(prokṣaṇācamanabhājanaṃ) とあり，「プロークシャナの容器とアーチャマナの容器」(*prokṣaṇabhājaṇam ācamanabhājanaṃ)

ではないことからも知られる。ツォンカパも『真言道次第』の中で「四種の水に対し容器は三つである。これはプロークシャナとアーチャマナの容器がひとつであるためである」と説明を加えている (TTP, vol. 161, 138, 4, 5)。文献によってはこの容器が両者の兼用ではなく「アーチャマナの容器」とよばれ，その水がプロークシャナとしても用いられると説くものもある。

JM では三つの容器と小碗の他にさらにもうひとつの水の容器が置かれた。これは前段落のすべての行為のための瓶を指すと考えられる。この容器の水は次のように用いられる。

> これ（アムリタクンダリンのマントラと「hūṃ」を指す・訳者注）をとなえた水を，右手に持ったクシャ草の先端でとり，檀木・乳木などの燃料すべてに撒布し，自分の右側に置け。自分自身と大杓・小杓にも撒布せよ。

これより，すべての行為のための瓶に入っていた水は，クシャ草を用いて燃料や道具，そして儀礼行為者自身に撒布するために準備されたことがわかる。文中にある燃料はこのあとのホーマで用いられ，大杓，小杓もホーマの供物を火中に投ずる時に使用される。

必ずしもホーマを前提としない VA では，JM の燃料や道具に対応する記述はない。しかし，同時代の文献のなかには，四種類の水の他に礼拝の対象に捧げられる供物，すなわち花，灯明，線香などが，これらの燃料や道具にかわって儀礼行為者の右側に置かれることを述べたものもある[14]。なお JM では一部の黒魔術的な儀礼において，水の容器と燃料などの位置関係がつぎのように逆になる。

> 呪殺，追放などの儀礼や忿怒鉤召の時には左手で水を撒布せよ。この場合，右側にすべての行為のための瓶とプロークシャナなどの容器を，左側にはすべての道具を配置せよ。

容器などの安置に関する AKS の記述は以下のとおりである。

> アルガの容器，同様にすべての行為のための水の容器に，すべての行為のためのマントラと自分のマントラをとなえよ。ふたつの蓮華の容器を左側に〔置け〕。撒布すべき水を，右手に握った〔クシャ草〕で檀木などに撒布せよ。火に投ぜられるそれ以外の供物を自分の右側に置く。呪殺，追放，鉤召の場合，撒布と安置を〔左右〕逆に行え。

文中の「アルガの容器」は文脈から考えて，四種類の水を入れる三つの容器であると考えられる。「ふたつの蓮華の容器」は他の文献ではみられない語句であるが，前文

14) Durjayacandra, *Suparigraha-nāma-maṇḍalopāyikā*, TTP, no. 2369, vol. 56, 143, 3, 6.

のアルガの容器とすべての行為のための水の容器を指すと考えるのが妥当であろう。

d）水を捧げる方法

容器とそれに入れる水などを準備し，規定どおりにこれを配置し，いよいよ水を捧げる段階になる。VA はこれについて，つぎのように述べる。

> このうち，パードヤの容器の水を，右の拳のおや指とひとさし指でつまんだ花でとり，自在に手を動かしながら，後述するマントラをとなえつつ，ひとさし指，中指，薬指，小指の順に開きながら，小碗に三度供えよ。
> 二番目の容器の水を，右手に持ったクシャ草の先端にとって，第二の小碗に三度撒布せよ。すべての行為のための瓶の水を撒布する時もこれと同様に行う。
> 二番目の容器の水を，右手の拳のおや指とひとさし指でつまんだ花でとり，後述するマントラをとなえながら，手を下向きにし，小指，薬指，中指，ひとさし指の順に開きながら，アーチャマナとして第二の小碗に三度供えよ。
> 三番目のアルガの容器の中の水などを両手にすくってとり，「oṃ āḥ hūṃ pravarasatkāraṃ argham pratīccha hūṃ svāhā」（オーム，アーハ，フーム，このすぐれたアルガをお受け取りください。フーム，スヴァーハー）ととなえながら，金剛合掌を開きつつ，第三の碗に三度供えよ。

ここに説かれる水を捧げる手順をわかりやすくまとめるとつぎのようになる。三つの容器の水は，一番目がパードヤ，二番目がプロークシャナとアーチャマナ，三番目がアルガにあたり，それぞれの容器の前に置かれた小碗の中に供えられる。供える時は特定の所作とマントラがあり，いずれの場合も三度ずつ供える。捧げる所作はパードヤとアーチャマナとがよく似ている。右手で容器の中にある花をつまみ，拳を開くことによって供える。拳を開く順序がパードヤの時にはひとさし指から小指に，アーチャマナの時にはその逆になる。手の向きはパードヤの場合，特に規定はないが，アーチャマナの場合，拳を下に向けるようにとあるので，おそらく逆に上を向けたのではないか。プロークシャナは，クシャ草の先に水を含ませ，これを小碗の中に撒布させて供えられる。アルガは両手ですくい合掌をつくり，これを開きながら供える。マントラは捧げられる水の名称が入れ替わるが，それ以外の部分は共通である。

プロークシャナのあとに付け加えられた「すべての行為のための瓶の水を撒布する時もこれと同様に行う」という規定は，JM が容器の配置のところで述べた，燃料，道具，そして自分自身への水の撒布に対応する。この瓶は VA での容器の準備のところで「これらとは別の容器」としてすでに言及されている。ここでは撒布する対象は明らかにはされていない。

つぎにJMの記述についてみてみよう。JMの該当箇所は前半部分が散文，後半部分が偈頌となっている。まず前半部から。

「oṃ āḥ hūṃ arghaṃ pratīccha hūṃ」（オーム，アーハ，フーム，アルガをお受けとり下さい）というマントラか，あるいは「oṃ āḥ hūṃ pravarasatkāraṃ arghaṃ pratīccha hūṃ svāhā」というマントラとともにアルガを供えよ。〔マントラの〕「arghaṃ」というところに「pādyaṃ」などの語[15]をかわりに入れて，パードヤ，アーチャマナ，アビウクシャナ(abhyukṣaṇa; 撒布水)を供えよ。儀礼に応じた花などと秘密の供物などでも供養せよ。

つぎに後半部が続く。

クシャ草の束などを用いて第一の小碗に，すべての行為のためのマントラをとなえた水でプロークシャナを三度供えよ。ひとさし指で花をとり，拳を下向きにして，小指，薬指，中指，ひとさし指の順に開いて，この〔第一の小碗〕にアーチャマナを供えよ。第二の貝殻の水でアルガを，第二の小碗に金剛合掌を開いて供える。
おや指とひとさし指で花をつまみ，仏像などの前で三度まわして，ひとさし指，中指，薬指，小指の順に開いて，第三の小碗にパードヤを供える。

アバヤーカラグプタは，この偈頌につづけて「このようなすぐれたおしえを私の先生は説かれたのである」と述べ，後半部が師からの伝承であることを示している。前半部のマントラの説明の箇所で，VAでは「プロークシャナ」(prokṣaṇa)にあたる語に「アビウクシャナ」(abhyukṣaṇa)という語が使われているのに対し，後半部では「プロークシャナ」にもどって説明されていることも，前半部と後半部が別々の情報源にもとづいていることを示唆している。なお「アビウクシャナ」(abhyukṣaṇa)という語は，VAの中で「すべての行為のための瓶の水を撒布する」という時に用いられた「撒布」の語と同じである。

捧げる方法自体は，水の順番がVAではパードヤ，プロークシャナ，アーチャマナ，アルガであったのに対し，JMではプロークシャナ，アーチャマナ，アルガ，パードヤと異なることをのぞいて，両者のあいだに大きなちがいはない。

AKSもこの部分は前半部と後半部にわかれ，いずれもJMとまったく同じ記述である。相違点は前半部と後半部とのあいだに「この場合，このアルガなどの手順は」というつなぎの言葉が入る点と，最後の「このようなすぐれたおしえを私の先生は…」のかわりに「以上が口伝(āmnāya)である」という文をおく二点のみである。

以上でJM, AKSの二文献では水の儀礼に関する記述は終了する[16]。VAの第二

15) チベット訳テキストでは「pādyaṃ ācamanaṃ abhyukṣaṇaṃ という語」となっている。
16) JMはこのあとに観想法をともなったアルガの捧げ方を述べているが，本稿とは直接関連しない。

章に対応するAKSのはじめの部分，すなわち「アルガなどを捧げる規定についての儀軌」もここで終わっている。つぎに述べる「水の儀礼に関する異説」と「水を捧げる部位」はVA以外には含まれない。

e）水の儀礼に関する異説

水を捧げる順序などについてVAはつぎのように補っている。

> 以上はパードヤ，プロークシャナ，アーチャマナ，アルガを供える手順を概観したものである。一説では状況に応じて別の方法で灑浄（プロークシャナ）を行えといわれる。一説ではアルガをはじめに供えよといわれる。一説ではアルガのみを〔供えよ〕ともいわれているので，時機や状況に応じて実行せよ。

このように，プロークシャナに関して別の方法があること，VAでは最後に供えられたアルガがはじめに供えられることもあること，アルガ以外の三種類の水は供えず，アルガのみを供えるという三つの説が紹介されている。これらの説の具体的な典拠はあきらかではない。ツォンカパも『真言道次第』の中で「水を供える順序」としてこの段落を引用しているが，他の箇所では他文献の引用と傍証をしきりに行うツォンカパも，ここではそれ以上の詳しい説明は加えていない。

f）水を捧げる部位

これもVAのみに含まれる記述である。アバヤーカラグプタによれば，四種類の水は礼拝の対象の特定の箇所に捧げられる。また四種の水の他に，花，線香，灯明，食物，塗香についても同じように言及している。これらは水につづいて捧げられる供物であると考えられる。

> パードヤは尊格 (devatā) の御足を浄めるために供えられると考えよ。プロークシャナはすべての部分に，アーチャマナは御手か御口に，アルガは御前に，あるいは御頭に〔供えられる〕。花は御頭に，香と灯明は御前に，食物は御前に，あるいは御手か御口に，塗香は御胸に供えられる。

類似の表現が同時代の他の文献の中にも含まれている[17]。

---

17) クリシュナ Kṛṣṇa によるホーマ儀軌 (TTP, no. 2384) [Miyasaka 1972: 222]，タターガタヴァジュラ Tathāgatavajra によるマンダラ儀軌 (TTP, no. 2226, vol. 52, 74, 3, 3–4) にみられる。

3. 考　　察

前章ではかなり詳しく水の儀礼の内容をたどってきた。儀礼についての考察に移る前に，この儀礼の要点をまとめておこう。

水の儀礼とは，礼拝の対象に礼拝者がパードヤ，プロークシャナ，アーチャマナ，アルガの四種類の水を一定の規則にしたがって捧げる儀礼である。水の種類は礼拝の対象の水を捧げられる部分によるものである。ただし，水の種類は四つであるのに対し，それらを入れる容器と捧げた水を受ける小碗はいずれも三つである。水を入れる容器は材質がいくつか決められている。また，容器の中には水だけではなく，穀物や花，香料などが含まれている。これらは水の儀礼にひきつづいて行われる儀礼の目的に応じて異なる。四種類の水は，文献間でのちがいはあるが，捧げられる順序が決められている。捧げる方法も水ごとに細かく規定され，その時となえられるマントラも異なる。これらの四種類の水に加えて，同じ内容物を入れたすべての行為のための瓶とよばれる容器が用いられ，ホーマの場合，儀礼行為者と儀礼の道具などにこの容器の水がふりかけられる。

水の儀礼が仏教の中でいつごろから行われていたのかは明らかではない。インドで密教が優勢になったころには，すでに実践されていたことは，漢訳された初期，中期密教の経典の中に「閼伽水(アルガ)」の語がしばしば登場することからも明らかである。しかし，大乗仏教の時代に水の儀礼が行われたかどうかは疑問である。また，パーリ語の聖典にはパードヤやアルガなどの四種類の水の名称はあらわれない[18]。

他の多くの仏教儀礼と同様に，水の儀礼もその原型はインドの他の宗教の中にもとめられる。ヴェーダの祭式のひとつである賓客接待の儀礼がそれである[19]。この儀礼は家庭内で行われるグリヒヤ祭式のひとつで，特定の客人に対して行われるもてなしの儀礼である。もてなされる客人には次の六種の人々がいる。1) 祭官，2) 師，3) 王，4) 結婚式の時の花婿の父，5) 学生期を終えて沐浴をすませたバラモン，6) 友人である。4) は結婚式，5) は学生期の終了時に行われるサマーヴァルタナ (samāvartana) とよばれる儀式の時に，その一部としてもてなしの儀礼が催される。これらの人々を迎えいれた者は，草でできた座をまずはじめにすすめ，客人が口をすすぐためにアーチャマナを，足を洗うためにパードヤを，さらにアルガを差し出す。これにつづいて，

18) aggha (<Skt. argha) と ācamana はそれぞれ本来の意味 (aggha は「価値」，ācamana は「口すすぎ」) では登場する。Andersen *et al.* [1926], Geiger [1960] の各項参照。
19) Mitra [1872: 190–191], Hillebrandt [1879: 79–80], Gonda [1980: 385–386] 参照。

マドゥパルカ (madhuparka) とよばれる，蜂蜜と米を主体とした粥の饗応をうけ，さいごに牛が捧げられる。

賓客接待の儀礼では，このように，水の儀礼に登場した四種類の水のうち，プロークシャナを除く三種類の水が客人へのもてなしの一部を構成している。

グリヒヤ祭式の賓客接待の儀礼は，『マヌ法典』*Manusmṛti* などに説かれる五大祭 (pañcamahāyajña) のひとつマヌシュヤ・ヤジュニャ (manuṣyayajña; 人に対する供犠) に受けつがれる[20]。これは，夕方の特定の時刻にやって来たバラモンに対する接待である。このようなバラモンはアティティ (atithi) とよばれ，水と座，食事，そして一夜の宿が提供される [渡瀬　1990: 103–104; Kane　1974: 749–756]。ここでは水の種類や名称は明らかにされていないが，アティティへの提供物は前の賓客接待の儀礼から牛を除したものに相当するとみてよいであろう。

客人をむかえ，これを丁重にもてなす儀礼は，ヒンドゥー教における神がみへの礼拝法のひとつプージャー (pūjā; 供養法) へとうけつがれる[21]。賓客接待などではもてなされるのは人間であったが，プージャーではこれが神がみとなり，神像に対してさまざまな供物が捧げられ，この中には水も含まれる。

ヒンドゥー教のプージャーは，全体が16の階梯からなる16ウパチャーラ・プージャー (ṣoḍaśopacārapūjā) へと整備される[22]。16ウパチャーラ・プージャーが成立した時代は明らかではないが，これとよく似たプージャーは，すでに諸プラーナ文献に見出される [Kane　1974: 729]。また，16ウパチャーラ・プージャーは寺院が属する宗派や寺院の神像の種類に限定されない礼拝法であり，現在でもあらゆるヒンドゥー教寺院においてさかんに行われている[23]。

16ウパチャーラ・プージャーの16の階梯は必ずしも一定ではないが，たとえば次のような構成をとる。1) 神を迎える，2) 座をすすめる，3) パードヤ・4) アルガ・5) アーチャマナをそれぞれ捧げる，6) 沐浴していただく，7) 衣裳・8) 聖紐をそれぞれ身につけていただく，9) 塗香・10) 花・11) 線香・12) 灯明・13) 食事を順に捧げる，14) 礼拝する，15) 右繞する，16) お帰りいただく [Kane　1974: 729]。

このように，16ウパチャーラ・プージャーも神がみを賓客にみたてた一種の接待の

20)『マヌ法典』では第3章第94偈以降に説かれる。
21) 賓客接待の儀礼，マヌシュヤ・ヤジュニャ，プージャーの三者は Nowotny [1957:116–117] によっても関連づけられている。
22) 16ウパチャーラ・プージャーについては Kane [1974: 729–735] に詳しい。松原 [1967: 328–332], Bühnemann [1988: 135–178] も参照。
23) 現在のヒンドゥー教寺院で行われている16ウパチャーラ・プージャーの研究と報告として Goudriaan [1970], Tachikawa [1983] がある。

方法をとる。水は2）から4）の階梯にかけて，パードヤ，アルガ，アーチャマナの順に捧げられる。

このうち，アルガは水の中に凝乳，米，クシャ草の穂先，牛乳，ドゥルヴァー草(durvā)，蜂蜜，大麦，白芥子などが混合され，礼拝者はこれをすくって神像に捧げる。また，パードヤ水は神像の足にかけられる。

これまでみてきたヴェーダの祭式やヒンドゥー教のプージャーでは，水の儀礼で捧げられた四種類の水の中の三種類，すなわち，アルガ，パードヤ，アーチャマナは必ずそろって登場してきたが，ただひとつプロークシャナのみはあらわれない。16ウパチャーラ・プージャーの16の階梯の内容がすでに述べたものとは異なるものであっても，アルガなどの三種類の水は必ずその中に含まれているのに対し，プロークシャナが構成要素となることは決してない。ヒンドゥー教のタントラ文献のひとつには，16ウパチャーラ・プージャーにさらに二種の供物を加えた18ウパチャーラ・プージャーとよばれる供養法が説かれる[24]。しかし，加えられた二種の供物の中にはプロークシャナはそこでも含まれてはいない。

そもそもプロークシャナとはいかなる水なのであろうか。プロークシャナがヴェーダの祭式やヒンドゥー教の儀礼に登場しないということは決してない。それどころか，プロークシャナはこれらの儀式の中で頻出するもっとも基本的な水である。プロークシャナは，祭式を行う人をはじめ，祭式で用いられる祭火，祭式を行う場所，祭火に投じられる燃料や供物，供犠にされる動物などにまかれる。儀礼の場面で食物を食べる時にはその食物に，衣服を身につける時にはその衣服にもこの水は撒布される。このように，プロークシャナは儀礼にかかわるさまざまな人や物に対して用いられ，その機能はこれらの対象の浄化と除災にあると理解されている [Gonda 1980: 126–127]。先に述べた16ウパチャーラ・プージャーでも，プロークシャナはプージャーの準備段階の最後，すなわち，神がみを迎えいれる直前に礼拝者自身と礼拝者に属する道具や捧げられる供物に対してまかれる。この時，プロークシャナは花やクシャ草を用いて撒布される。

ここでわれわれは，これらの儀礼に用いられる水には，異なった方向性をもった二種類の水があることを知る。ひとつは礼拝の対象に向けられる水であり，もうひとつは儀礼行為者自身と彼に属するものに向けられる水である。ここでは以下，便宜上，ひとつめの水をAタイプ，ふたつめの水をBタイプの水とよぶことにしよう。

ところで，本来Bタイプの水であったプロークシャナがもっていた機能は，ホーマ

24) Gupta [1972: 219–222] 参照。ヒンドゥー・タントリズムのプージャーについては Gupta *et al.* [1979: 146–148] 参照。

儀軌JMの中ですべての行為のための瓶の中に入っていたアビウクシャナがはたしていた役割と同じである。他の四種類の水と同じ内容物をもった水でありながら，アビウクシャナのみは燃料や道具，そして儀礼行為者自身に向かってまくようにJMは指示していた。VAではアビウクシャナがまかれる対象は明示されていなかったが，特別な規定がないということは，JMと同じように供物や行為者がその対象であると理解すべきであろう。

もともとBタイプの水であったプロークシャナにかわって，VAやJMではアビウクシャナがその役割をはたしていることと，プロークシャナが他の三種類の水と同じAタイプの水としてあつかわれていることとが，まったく無関係であったとは考えにくい。しかし，はたしてアビウクシャナが導入されたため，同じBタイプであったプロークシャナがAタイプとなったのか，あるいは，プロークシャナがAタイプに含まれるようになったために，あらたにBタイプの水としてアビウクシャナが必要となったのか，その前後関係は明らかではない。

いずれにしても，VAやJMの説くプロークシャナがBタイプではなくAタイプとして意識されていたことは確かである。これは，たとえば，プロークシャナが捧げられる時のマントラが，他の三種類の水と同じで，ただ水の名称だけを入れかえた「このすぐれたプロークシャナをお受けとりください」という内容であったことからも明らかである。

しかし，ここでわれわれは，水の儀礼においてプロークシャナが他の三種類の水と決して画一的にあつかわれなかったことを思い出す。それは四種類の水を入れた容器の問題である。プロークシャナのみは他の水と異なり，専用の容器を与えられなかった。また，その捧げ方も他の三種類の水が「供えよ」と指示されたのに対し，プロークシャナはクシャ草を用いて「撒け」と表現された。本来，タイプの異なった水であったからこそ，プロークシャナは専用の容器を持たず，また「供える」のではなく「撒く」という，Bタイプにふさわしい捧げられ方がされたのではないであろうか。

水の儀礼ではプロークシャナはアーチャマナと容器を共有していた。あるいはアーチャマナの水がプロークシャナとして用いられることもあった。水の儀礼を見るかぎり，他のアルガとパードヤもアーチャマナと条件は同じである。それではなぜプロークシャナはアーチャマナと結びついたのであろうか。

アーチャマナはアルガなどとグループを形成する場合はつねにAタイプの水であるが，単独で用いられる場合は必ずしもそうではない。ヴェーダの祭式やヒンドゥー教の儀礼でアーチャマナが単独で用いられる場合，もっとも多い例が，「アーチャマナ」

(嗽口水)というその名のとおり，儀礼行為者が自分の口をすすぐために用いるケースである[25]。アーチャマナは必ずしも儀礼の場面でのみ用いられただけではなく，日常生活一般において，何らかの行為を始める前，あるいは終えた後に口をすすぐために用いられる。『マヌ法典』などではその方法や回数が細かく規定されている [渡瀬 1990: 74–75]。これまで何度も登場してきた16ウパチャーラ・プージャーでも，準備段階の一番最初に，儀礼行為者が自分の口をすすぐための水としてアーチャマナはあらわれる [TACHIKAWA 1983: 130; BÜHNEMANN 1988: 104–107]。

このように，アーチャマナはAとBの両方の性格をあわせもった水であるということができる[26]。水の儀礼の中で，もともとBタイプの水であったプロークシャナがアーチャマナと容器を共有できたのは，アーチャマナ自身も本来Bタイプの性格をそなえていたからではないだろうか[27]。

水の儀礼がVAやJMと同時代のインド密教でさかんに行われたことは疑いえない。しかしながら，これらのテキストのようにその方法や目的を細かく規定した文献は，現在ほとんど知られていない。JMと同じくホーマをあつかった文献には，これらの水がしばしば言及されるが，その性格のちがいまで明確に示したものはなく，また登場する水もパードヤだけであったり，アルガ，アーチャマナ，プロークシャナの三種であったり，パードヤとアーチャマナの二種であったりして一定しない[28]。

水の儀礼の四種の中で，プロークシャナとアーチャマナが他のふたつの水とは異なった位置にあることを，インド密教の影響を受けた地域でのふたつの例に求めてみよう。

ひとつは日本で行われている護摩儀礼である。護摩はホーマに由来し，その形態はヴェーダのホーマ祭式と共通性をもっているといわれるが [伊原 1976: 361–363]，その具体的な検証はこれからの課題である。日本で行われる不動護摩では，儀礼を行う行者の左右にひとつずつの閼伽器が置かれる。この中の水，すなわち閼伽水（アルガ）は，護摩の儀式の中で本尊の足を洗浄するために，閼伽器をのせた閼伽台に三滴落とされる [宮坂 1976: 232]。これがパードヤに該当することは明らかである。一

25) アーチャマナが用いられる場面については Gonda [1980: 333] に詳しい。Ranghachari [1931: 52], Vidyarnava [1974: 13–15] も参照。

26) ただし，ある特定の場面では必ずどちらかひとつの性格をもつだけであり，同時にA, B両タイプの機能をもつことはない。

27) AKSのチベット訳テキストでは，北京，ナルタン両版が「プロークシャナとアーチャマナの容器」(gsang gtor dang zhal gsil gyi snod) であるのに対し，デルゲ版は「アーチャマナの容器とプロークシャナの容器」(zhal gsil gyi snod dang gsang gtor gyi snod) という読みを示す。これは，デルゲ版の校訂者がプロークシャナとアーチャマナの容器の兼用についての知識をそなえていなかったためと考えられる。

28) たとえば Miyasaka [1972: 232, 244, 294]。チベットではJMの影響が強かったようである [中山 1988: 300–301]。

方，行者の正面にある火炉の左側には，嗽口と灑浄のための器がそれぞれひとつずつ置かれている。プロークシャナに相当する灑浄水はここではBタイプの水として護摩木や道具に茅草によって撒布され，一方，嗽口水（アーチャマナ）は火天の口すすぎのために，火中に供物を供えるたびに火炉にむけて注がれる。嗽口水は機能としてはAタイプの水であるが，その置かれた位置は他のAタイプの水である閼伽水からは離れたBタイプの灑浄水の隣である[29]。

もうひとつの例はチベット仏教寺院の祭壇に置かれた供物である。これらは精神的な供物に対して「外的な供物」(phyi'i mchod pa) とよばれる。また，「ウパチャーラ・プージャー」を意味する nye bar spyod pa'i mchod pa という語が用いられることもある。これらの供物は以下の七種によって構成される。1）アルガ，2）パードヤ，3）花，4）香，5）灯明，6）塗香，7）食物[30]。七種の供物の筆頭にはアルガとパードヤがあげられているが，インドの賓客接待の儀礼や16ウパチャーラ・プージャーにおいてあれほど強い結束力をもったアルガ・パードヤ・アーチャマナのグループがここでは解消し，純粋なAタイプの水であるはじめの二種の水のみが登場している。

4. おわりに

前章で述べた四種類の水がそなえていた性格のちがいは，これらの水を指すことばの本来の意味をある程度反映していると思われる。

四種類の水の総称としても用いられる「アルガ」(argha あるいは arghya) は「価値がある」「値する」という √arh からの派生語である。これは水を捧げる対象が尊敬されるべき人であり，これにふさわしい供物，特に水を指す語となる。「パードヤ」(pādya) は pāda，すなわち「足」から作った「足に関する」という意味の形容詞であり，これが「足を洗うための水」の意味で用いられる。これらのふたつの語はいずれも対象に依存した語であるということができる。一方，「アーチャマナ」(ācamana) は ā√cam の名詞形であり，「手を使って口をすすぐこと」をあらわす。また「プロークシャナ」(prokṣaṇa) は pra√ukṣ すなわち「水を撒布する」という動詞に由来する。すべての行為のための瓶の中の「アビウクシャナ」(abhyukṣaṇa) も，接頭辞

29）不動護摩の護摩壇上の配置は真鍋 [1985: 179] 参照。不動護摩については立川他 [1986] に写真による詳しい報告がある。

30）これらの供物の組みあわせはツォンカパやその高弟ケードゥプジェの著作にみられる [高田 1978: 297–300; Lessing *et al.* 1978: 177–183]。現地調査においても Lessing [1942: 140], Nebesky-Wojkowitz [1975: 400], Beyer [1978: 148] らによって報告されている。図像資料にも Karmey [1988: 108–109] がある。供物の説明は Ekwall [1964: 166–170] 参照。

が pra から abhi にかわっただけで動詞は同じ √ukṣ であり，意味もほとんどかわらない。はじめのふたつの水が対象に依存した語であらわされたのに対し，これらの水は水を用いた行為そのものを示す語である。前章で用いたAタイプ，Bタイプも対象の存在を前提とし，これに向けられた水と，対象ではなく水を撒く行為に比重がおかれた水と言いかえることができる。なお，アーチャマナのかわりに「ācamanīya」という語が用いられる場合もあるが，この時は「すすぐべきもの」すなわち水そのものを指すことばとなり，アーチャマナのもっていた中立的な立場を連想させる。

インド後期密教に属するアバヤーカラグプタの二著作 VA, JM を中心に，これらと密接な関係をもつ AKS などの文献を参照しながら，水の儀礼の概要の記述と考察を行った。

水の儀礼において重要な役割をはたす四種類の水，アルガ，パードヤ，アーチャマナ，プロークシャナはいずれも礼拝の対象に捧げられる水として，これらの文献の中ではあつかわれていた。しかし，それぞれの水がそなえている背景は必ずしも一様ではない。これは，儀礼で用いられる水に，礼拝の対象に捧げられる水と，儀礼行為者自身および儀礼行為者に属するものに向けられる水という，方向の異なる二種類のタイプがあることに関連する。本来，四種類の水の中のアルガとパードヤは前者のタイプに，プロークシャナは後者のタイプに，アーチャマナはいずれのタイプにも属していた。水の儀礼では，これらはすべてはじめのタイプの水として用いられ，後者のタイプの水として，すべての行為のための瓶に入ったアビウクシャナがプロークシャナのかわりをつとめている。しかし，四種の水の中でも，プロークシャナのみは専用の容器をもたず，アーチャマナと容器を共有していたことや，捧げる方法が他と異なることに，四種類の水が本来もっていたこのような性格のちがいを見ることができる。

付　　記

本稿は，国立民族学博物館における平成二年度共同研究「南アジア諸パンテオンの表現方法」（代表・立川武蔵）の成果の一部である。資料の収集にあたっては，庭野平和財団より平成二年度研究助成を受けた（研究課題「ネパールにおける仏教儀礼の変容に関する研究」）。

略　　号

AKS: Vajrācāryakriyāsmuccaya
JM: Jyotirmañjarī
NPY: Niṣpannayogāvalī
TTP: Tibetan Tripitaka, the Peking edition, Suzuki Foundation.
VA: Vajrāvalī
大正蔵：大正新脩大蔵経

Skt.: Sanskrit
Tib.: Tibetan

文　　献

ANDERSEN, D. & H. SMITH (eds.)
1926 *A Critical Pāli Dictionary* vol. 1 part 1. Copenhagen: The Royal Danish Academy.

BEYER, Stephan
1978 (1973) *The Cult of Tārā.* Berkeley: University of California Press.

BHATTACHARYYA, Benoytosh
1972 (1949) *Niṣpannayogāvalī of Mahāpaṇḍita Abhayākaragupta.* G.O.S. No. 109. Baroda: Oriental Institute.

BÜHNEMANN, G.
1988 *Pūjā: A Study in Smārta Ritual.* Vienna: Institut für Indologie der Universität Wien.

CROOK, W.
1921 Water, Water-gods (Indian). In J. Hastings (ed.), *Encyclopaedia of Religions and Ethics*, pp. 716–719.

EDGERTON, F.
1977 (1953) *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammer and Dictionary* vol. II. Delhi: Motilal Banarsidass.

EKVALL, R. B.
1964 *Religious Observances in Tibet.* Chicago: University of Chicago Press.

エリアーデ，ミルチャ
1974b『豊饒と再生——宗教学概論(2)——』久米博訳　せりか書房。

GEIGER, W. (ed.)
1926 *A Critical Pāli Dictionary* vol. 2. Copenhagen: The Royal Danish Academy.

GONDA, J.
1977 *The Ritual Sūtras.* Wiesbaden: Otto Harasowitz.
1980 *Vedic Ritual: The Non-solemn Rites.* Leiden: Brill.
1985 *The Ritual Functions and Significance of Grasses in the Religion of Veda.* Amsterdam: North-Holland Publishing Company.

GOUDRIAAN, T.
1970 Vaikānasa Daily Worship according to the Handbooks of Atri, Bhṛgu, Kāśyapa, and Maricī. *Indo Iranian Journal* 12: 161–215.

GOUDRIAAN, T. & S. GUPTA
1981 *Hindu Tantric and Śākta Literature.* Wiesbaden: Otto Harasowitz.

GUPTA, Sanyukta
1972 *Lakṣmī Tantra: A Pañcarātra Text.* Leiden: Brill.

GUPTA, S., D. J. HOENS & T. GAUDRIAAN
1979 *Hindu Tantrism.* Leiden: Brill.

HILLEBRANDT, A.
1879 *Ritualliteratur: Vedische Opfer und Zauber.* Strassburg: Trubner.

伊原照蓮
1976「印度の祭式学——護摩の理解のために——」『成田山仏教研究所紀要』 1: 337–365。

KANE, P. V.
1974 *History of Dharmaśāstra.* vol. 2 (2 parts). Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute (2nd ed.).

KARMAY, Samten G.
1988 *Secret Visions of the Fifth Dalai Lama.* London: Serindia Publications.

片山一良
1987 「仏教における水のシンボリズム——献水 (dakkhiṇodaka)——」『宗教学論集』13: 33–42。
風間喜代三
1990 『ことばの身体誌——インド・ヨーロッパ文化の原像へ——』 平凡社。
Lessing, F. D.
1942 *Yung-Ho-Kung: An Iconography of the Lamaist Cathedral in Peking.* Stockholm.
Lessing, F. D. & A. Wayman
1978 (1968) *Introduction to the Buddhist Tantric System.* Delhi: Motilal Banarsidass.
Mitra, Babu Rajendralāla
1872 Beef in Ancient India. *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 2: 174–197.
真鍋俊照
1985 「密教修法と美術」『密教美術大観　第三巻』朝日新聞社, pp. 171–180。
松原光法
1967 「ヴィシュヌ教における最高神崇拝」『講座東洋思想　第1巻インド思想』東京大学出版会, pp. 312–332。
松長有慶
1988 「密教と水」『成田山仏教研究所紀要（仏教思想史論集　II)』11: 317–330。
宮治　昭
1981 『インド美術史』吉川弘文館。
宮坂宥勝
1972 Tibetan Texts of Homavidhi. *Acta Indologica* 2: 207–300.
1976 「弘法大師の密教——不動明王信仰を中心として——」『成田山仏教研究所紀要』1: 187–258。
Monier-Williams, M.
1982 (1899) *A Sanskrit English Dictionary.* Oxford: Oxford University Press.
森　雅秀
1989 「『完成せるヨーガの環』(*Niṣpannayogāvalī*) 第21章「法界語自在マンダラ」訳およびテキスト」長野泰彦・立川武蔵編『法界語自在マンダラの神々』（国立民族学博物館研究報告別冊7号）pp. 235–282。
1991a 「Abhayākaragupta のマンダラ儀軌 *Vajrāvalī*」『印度学仏教学研究』39（刊行予定)。
1991b 「インド密教における建築儀礼——*Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā* 和訳(1)——」『名古屋大学文学部研究論集』111（刊行予定)。
モース, M.・H. ユベール
1983 『供犠』小関藤一郎訳　法政大学出版局。
中山照玲
1988 「チベット仏教における実践の一形態——ケードゥブジェ著『吉祥秘密集会阿閦息災・増益護摩儀軌』訳注（二)——」『成田山仏教研究所紀要（仏教思想史論集　II)』11: 293–303。
Nebesky-Wojkowitz, Rene de
1975 (1956) *Oracles and Demons of Tibet: The Cult and Iconography of the Tibetan Protective Deities.* Graz: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt.
Nowotny, F.
1957 Das Pūjāvidhinirūpana des Trimalla. *Indo Iranian Journal* 1: 109–154.
Obermiller, E.
1986 (1932) *The History of Buddhism in India and Tibet by Bu-ston.* Delhi: Sri Satguru Publications.
奥山直司
1984 「Jyotirmañjarī の研究(I)」『文化』47(1–2): 29–46。
1986 「Jyotirmañjarī の研究(II)」『論集』13: 1–18。
Ranghachari, K.
1931 The Śri Vaishunava Brahmans. *Bulletin of the Madras Government Museum* (n.s.) 2:

1–158.
ROERICH, G. N.
1976 (1949) *The Blue Annals.* Delhi: Motilal Banarsidass.
SKORUPSKI, Tadeusz
1983a *The Sarvadurgatipariśodhana Tantra: Elimination of All Evil Destinies.* Delhi: Motilal Banarsidass.
1983b Tibetan Homa Rites. In F. Staal (ed.), *Agni* vol. 2, Berkeley: Asian Humanities Press, pp. 403–417.
杉本卓州
1984 『インド仏塔の研究』 平楽寺書店。
TACHIKAWA, Musashi
1983 A Hindu Worship Service in Sixteen Steps, *Shoḍaśa-upacāra-pūjā. Bulletin of the National Museum of Ethnology* (Osaka) 8(1): 104–186.
立川武蔵・桑村恵美子・山出あけみ
1986 「不動護摩の記録」 *Saṃbhāṣa* 8: 1–48。
高田仁覚
1978 『インド・チベット真言密教の研究』 高野山密教学術振興会。
辻直四郎
1966 『インド文明の曙』 岩波書店。
塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文
1989 『梵語仏典の研究　Ⅳ　密教経典篇』 平楽寺書店。
VIDYĀRNAVA, R. B. S. C.
1979 (1918) *The Daily Practice of the Hindus containing the Morning and Midday Duties.* New Delhi.
フリース, A. D.
1984 『イメージ・シンボル事典』 山下主一郎・他訳　大修館書店。
渡瀬信之
1990 『マヌ法典』 中央公論社。
頼富本宏
1977 「無上瑜伽密教の実践儀礼」 『日本仏教学会年報』 43: 1–17。

附　　録

1) アバヤーカラグプタ著『ヴァジュラーヴァリーという名のマンダラ儀軌』「アルガなどを捧げる規定についての儀軌」

a) サンスクリット・テキスト

Ms: Skt. Ms. belonging to the National Archives, Kathmandu, No. 3–402/vi, ff. 5a, 4–6a, 1.

iha yathāyogaṃ vakṣyamāṇeṣu[1] vidhiṣu
hemarūpyaśilātāmradārumṛnmayamauktikaṃ//
śaṅkhaṃ parṇapuṭaṃ[2] pādyaprokṣācamanārghabhājanaṃ//
tātrānyatamabhājane yavakṣīrasitakusumakuśatilalājāsāmṛtasitagandhodakāni
prakṣipya oṃ āḥ hūṃ iti mantreṇa svādhipatimantreṇa[3] ca kuṇḍalimantreṇa ca saptavārān sāṣṭaśataṃ vā mantrayec[4] chāntyarthaṃ/
tiladadhipītapuṣpadarbhasāmṛtapītagandhajalaṃ prakṣipya tathā japet puṣṭyarthaṃ/

tataḥ svavāmapārśve tadarghabhājanaṃ pādyabhājanaṃ ca prokṣaṇā-
camanabhājanaṃ ca dhārayet teṣām agre pratīcchakakevalapātratrayaṃ
ca/(5b) tatra pādyabhājanasya jalaṃ savyena muṣṭinā puṣpam aṅguṣṭha-
tarjanīsaṃdaṃśenādāya līlayāṅgulīr bhrāmayan pātre vakṣyamāṇamantreṇa
trir dadyāt tarjanīṃ madhyamām anāmikāṃ kaniṣṭhāṃ ca kramān muñcan/
dvitīyabhājanasya jalena savyakarasthakuśavittikāgragṛhītena triḥ prokṣayet/
dvitīye pratīcchake sārvakarmikakalaśajalenābhyukṣaṇe 'py evaṃ/
dvitīyabhājanasyaiva jalaṃ savyahastamuṣṭinā puṣpam aṅguṣṭhatarjanīs-
aṃdaṃśena gṛhītvācamanāya dvitīya eva pratīcchake vakṣyamāṇamantraṃ
paṭhann adhomukhamuṣṭinā trir dadyāt krameṇa kaniṣṭhām anāmikāṃ
madhyamāṃ tarjanīṃ ca muñcan tṛtīyasyārghabhājanasya jalādikam
añjalinā gṛhītvā oṃ āḥ hrīḥ pravarasatkāraṃ arghaṃ pratīccha hūṃ svāheti
paṭhan vajrāñjalivikāśena dadyāt trīn vārāṃs tṛtīye pratīcchake pūrvakar-
matraye tv arghaṃ hitvā pādyaṃ prokṣaṇam ācamanam iti paṭhet/
ayaṃ ca pādyaprokṣaṇācamanārghadānakramaḥ prāyaśo dṛśyate kvacid
anyathā prokṣaṇantu yathāyogaṃ kvacid arghadānaṃ prathamaṃ kvacid
arghadānam eveti yathāvasaraṃ yathāyogaṃ kuryāt/
tatra pādyam udakaṃ devatānāṃ pādayoḥ prakṣālanāya dīyamānaṃ
cintayet/prokṣaṇaṃ śarvagātre ācamanaṃ kare mukhe vā/argham agre
śirasi vā/puṣpaṃ śirasi dhūpaṃ dīpaṃ cāgre naivedyam agre kare vā mukhe
vā/gandhaṃ hṛdīti sarvavidhiṣv ity arghādi(6a)dānalakṣaṇavidhiḥ/

1) Ms vakṣyamāṇeṣuḥ. 2) Ms *inserts* vā. 3) Ms svādhipatiḥ mantreṇa. 4) Ms mantrayaiḥ.

b）チベット訳テキスト

D: 'Jig med 'byung gnas sbas pa, *dKyil 'khor gyi cho ga rdo rje phreng ba*, The Nying ma Edition of the sDe dge bKa'-'gyur and bsTan-'gyur, Oakland, Dharma Publishing, no. 3140, vol. 61B, 989, 2–990, 5.
N: _____, _____, The sNar thang edition belonging to The India Office Library and Records, London, no. 1956, thu 7a, 7–8a, 5.
P: _____, _____, TTP, no. 3961, vol. 80, 82, 5, 6–83, 2, 5.

'dir 'chad bzhin pa'i cho ga rnams su ji ltar rigs par/
gser dngul rdo dang zangs dang shing//sa[1] byas nya phyis[2] dung dang ni//
'dab ma'i skyong bu zhabs bsil dang//bsang gtor zhal bsil mchod yon snod//
de dang snod gzhan du nas dang 'o ma dang/me tog dkar po dang/ku sha
dang/til dang/'bras yos dang/dri dkar po'i chu bdud rtsi dang bcas pa rnams
blugs la/oṃ āḥ hūṃ zhes pa'i sngags (83, 1) dang/rang gi rigs kyi bdag po'i
sngags dang/bdud rtsi 'khyil pa'i sngags kyis lan bdun nam/brgya rtsa brgyad
du bsngags te zhi ba'i don du'o//rgyas pa'i don du til dang/zho dang me tog
ser po dang/ku sha dang/dri ser po'i chu bdud rtsi dang bcas pa blugs la de
ltar bzlas par bya'o//
de nas rang gi g'yon logs[3] su mchod yon gyi snod dang/zhabs bsil gyi snod

dang/bsang gtor dang/zhal bsil gyi snod gzhag par bya'o//de rnams kyi mdun du bzed[4] zhal gyi snod stong pa gsum yang ngo//de la khu tshul g'yas pa'i mthe bong[5] dang/mdzub mo'i skam pas zhabs bsil gyi snod kyi chu dang me tog 'gying ba'i tshul gyis sor mo rnams bskor zhing blangs la 'chad par 'gyur ba'i sngags kyis mdzub mo dang gung mo dang srin lag dang/mthe'u chung rnams rim gyis dgrol zhing snod du lan gsum dbul lo// snod gnyis pa'i chu lag pa g'yas par bzung ba'i ku sha'i chun po'i rtse mos blangs te bzed zhal gyi snod gnyis par lan gsum bsang gtor bya'o//las thams cad pa'i bum pa'i chu yis[6] bsang gtor bya ba la yang de ltar ro//snod gnyis pa nyid kyi chu g'yas pa'i khu tshur gyi mthe[7] bong dang/mdzub mo'i skam pas me tog bzung la/zhal bsil gyi ched du bzed zhal gnyis pa de nyid du 'chad par 'gyur ba'i sngags brjod cing/kha 'og du phyogs pa'i khu tshur gyi mthe chung dang srin lag dang gung mo dang/mzhub mo rnams rim gyis dgrol zhing lan gsum du bdul lo//gsum pa mchod yon gyi snod gyi chu la sogs pa snyim pas bzung la/oṃ āḥ hrīḥ pravarasatkāraṃ arghaṃ pratīccha hūṃ svāhā zhes brjod cing bzed zhal gyi snod gsum par rdo rje thal mo phye bas lan gsum dbul lo//gong gi (83, 2) zhabs bsil dang/bsang gtor dang/zhal bsil gsum ni arghaṃ gyi sgra dor nas rim pa bzhin du pādyaṃ dang/prokṣaṇaṃ dang/ācamanaṃ[8] zhes pa bcug pas dbul lo//

zhabs bsil dang/bsang gtor dang/zhal bsil dang[9]/ mchod yon sbyin pa'i rim pa[10] 'di ni phal cher las mthong ngo//kha cig tu ni gzhan du'o//bsang gtor ni ji ltar rigs pa'o//kha cig tu ni dang po mchod yon dbul lo//kha cig tu ni mchod yon dbul ba kho na'o//skabs ji lta bar ji ltar 'os par bya'o//de la zhab bsil gyi chu ni lha rnams kyi zhabs bkru[11] ba'i phyir dbul bar bsam so//bsang gtor ni sku thams cad la'o//zhal bsil ni phyag gam zhal du'o// mchod yon ni mdun nam dbu la'o[12]//me tog ni dbu la'o//bdug spos dang mar me ni mdun du'o//lha bshos ni mdun nam phyag gam zhal du'o//dri ni thugs kar ro//de lta bu ni cho ga thams cad du'o//mchod yon la sogs pa dbul ba'i mtshan nyid kyi cho ga'o//

1) D sar. 2) N byis. 3) P log. 4) N gzed. 5) N P 'ong. 6) D chus. 7) N P the. 8) N P añjamanaṃ. 9) D *omits* zhal bsil dang. 10) D pas. 11) D bgu. 12) P dbul lo.

2) アバヤーカラグプタ著『ジュヨーティル・マンジャリー』「外的なホーマの儀軌」チベット訳テキスト（部分）

D: 'Jig med 'byung gnas sbas pa, *sByin sreg gyi cho ga 'od kyi snye ma*, The Nying ma Edition of the sDe dge bKa'-'gyur and bsTan-'gyur, Oakland, Dharma Publishing, no. 3142, vol. 61B, 1288, 5–1289, 6; 1291, 6–1292, 3.
N: _____, _____, The sNar thang edition belonging to The India Office Library and Records, London, no. 1958, thu 179b, 7–180b, 3; 182a, 1–182a, 6.
P: _____, _____, TTP, no. 3963, vol. 80, 156, 2, 7–156, 4, 2; 157, 1, 8–157, 2, 7.

gser dngul rdo dang zangs dang shing//sa snod nya phyis dung dang ni//
mdab ma'i skyong bu mchod yon dang//bsang gtor zhal bsil zhabs bsil snod//
der nas dang 'o ma dang me tog dkar po dang til dang ku sha dang 'bras yos
dang ldan pa bdud rtsi dang bcas pa'i dri dkar po'i chu rnam par rgyal pa'i
bum pa na gnas pa blugs la spos kyis[1] bdug ste/rang gi lha'i sngags sam
(156, 3) las thams cad pa'i sngags kyi mthar svāhā dang bcas pa bzhi ba'i don
du[2] lan brgyar bzlas par[3] bya'o//rgyas pa la ni de bzhin du til dang bcas
pa'i zho dang me tog ser po dang dri ser po la sogs pa'i chu la yi ge oṃ gyi
mtha' can gyis so//dbang la ni dri dmar po la sogs pa'i chu la yi ge hoḥ'i mtha'
can gyis so//de kho na bzhin du dgug pa la mthar[4] yi ge dzaḥ ces[5] pas so//
mngon spyod la longs spyod[6] pa'i rdza phor gyi dum bu la sogs pa'i snod du
khrag dang bcas pa'i ko dra ba dang ba'i lci ba dang bcas pa'i chu dang dri
nga ba dang/dri med pa'i me tog nag po la sogs pa dang ldan pa'i chu la
mthar yi ge phaṭ ces pas so//de ltar drag pos dgug pa la yang ngo//rgyas pa
la sogs pa thams cad du las thams cad pa la dri dang me tog dang til dang ku
sha dang 'bras yos dang chu rnams las dang rjes su mthun pa ci ltar rnyed pa
gzhug par bya'o//mchod yon gyi rab tu byed pa'o//
zhi ba dang/rgyas pa dang/dbang dang/[7]dbang gis dgug pa'i las rnams la
bdud rtsi 'khyil pa'i sngags dang yi ge hūṃ bzlas pa'i chu snod dang/mchod
yon la sogs pa'i snod gsum yang rang gi g'yon du'o//de dag gi mdun du bzed
zhal gyi snod gsum yang maṇ 'ji la sogs pa'i steng du bkod la/de nyid bzlas
pa'i chu lag pa g'yas pa na gnas pa'i ku sha'i rtse mos blangs pas yam shing
dang bud shing la sogs pa'i bsreg[8] rdzas thams cad bsang zhing rang gi g'yas
phyogs su dgod par bya'o//rang dang dgang gzar blugs gzar yang bsang bar
bya'o//rnam par rgyal ba dang las thams cad pa'i bum pa la sogs pa lhag par
gnas pa ni rdo rje phreng bar brjod pa'i cho gas bya'o//cho ga bsdud pa la dga'
ba ni (156, 4) bum pa med do zhes kha cig go//gsad pa dang skrad[9] pa la sogs
pa'i las dang drag po'i dgug pa la yang lag pa g'yon gyis[10] bsang gtor bya'o//
g'yas phyogs su las thams cad pa dang bsang gtor la sogs pa'i snod dang g'yon
logs su rdzas thams cad gzhag par bya'o//dgod pa'i rab tu byed pa'o//

1) N P kyi. 2) D *omits* du. 3) N P pa. 4) P mtha'. 5) D zhes. 6) N P spyad. 7) D *omits* dbang dang/. 8) D sreg. 9) D bskrad. 10) N P gyi.

oṃ āḥ ruṃ[1] arghaṃ pratīccha hūṃ/(157, 2) zhes pa 'dis sam/oṃ āḥ hrīḥ
pravarasatkaraṃ arghaṃ praticcha hūṃ svāhā/zhes bya pas mchod yon dbul
lo//arghaṃ zhes pa'i gnas su pādyaṃ dang/añcamanaṃ dang abhyukṣaṇaṃ[2]
zhes pa bcug nas/zhabs bsil dang/zhal bsil dang bsang gtor dbul lo//las dang
rjes su mthun[3] pa'i me tog la sogs pa dang/gsang ba'i mchod pa la sogs pa
rnams kyis kyang mchod par bya'o//ji ltar rigs par yang/
ku sha'i chun pos snod dang por//las kun byed las chu yis ni//
bsang gtor lan gsum dbul bar bya//de nyid du ni zhal bsil te//

mdzub mos me tog blangs nas ni//khu tshur 'og tu kha bstan nas//
mthe'u chung srin lag[4] gung mo dang//mdzub mo rim gyis[5] dgrol zhing dbul//
gnyis pa'i dung gi chu yis ni//mchod yon bzed zhal gnyis pa ru//
rdo rje'i snyim pa kha phye bas//dbul zhing zhal bsil gsum par ni//
khu tshur bcas nas mtheb mdzub kyi//skam pas me tog blangs nas su//
sangs rgyas rnams kyi spyan sngar ni//lan gsum bskor ba'i sor mo ni//
mdzub mo gung mo ming med dang//mthe'u chung rim gyis[6] dkrol bas so//
zhes bya ba'i gdams pa kyad par kho bo'i bla ma rnams kyis gsungs so[7]//
phyogs gzhan ni dpal sam pu ti'i rgyud las/
sngon du mchod yon gyi snod[8]//
ces gsungs pa'i dgongs pa'o//

1) D hūṃ. 2) D abhyukhyaṇaṃ. 3) N P 'thun. 4) P lags. 5) N P rims kyis. 6) N P rims klyis. 7) N P rnams gsung ngo. 8) Cf. *Sampuṭi nāma mahātantra*, TTP, no. 26, vol. 2, 277, 3, 5.

3) ジャガッド・ダルパナ『金剛阿闍梨所作集』「アルガなどを捧げる規定についての儀軌」および「外的なホーマの儀軌」(部分)

a) サンスクリット・テキスト

Ms: Skt. Ms. belonging to the National Archives, Kathmandu, No. 4–123, ff. 15b, 3–16b, 2.

iha yathāyogaṃ vakṣyamāṇeṣu vidhiṣu
hemarūpyaśilātāmradārumṛnmayamauktikaṃ//
śaṃkhaṃ parṇapuṭaṃ pādyaprokṣācamanārghabhājanaṃ[1]//
tatraikasmin bhājane yavakṣīrasitakusumakuśatilalājāsāmṛtasitagandhodakāni prakṣipya oṃ āḥ hūṃ iti mantreṇa svādhipatimantreṇa ca[2] kuṇḍalimantreṇa ca saptavārān aṣṭottaraśataṃ vā mantrayet śāntyarthaṃ/ tiladadhi(16a)pītapuṣpadarbhasāmṛtapītagandhajalaṃ prakṣipya tathā japet puṣṭyarthaṃ/
tataḥ svavāmapārśve tadarghabhājanaṃ pādyabhājanañ ca prokṣaṇācamanabhājanañ[3] ca dhārayet teṣām agre pratīcchakakevalapātratrayañ ca/tatra pādyabhājanasya jalaṃ savyena muṣṭinā puṣpam aṅguṣṭhatarjanīsaṃdaṃsenādāya līlayāṅgulīr bhrāmayan pātre vakṣyamāṇamantreṇa trir dadyāt tarjanīṃ madhyamām anāmikāṃ kaniṣṭhāṃ ca[4] kramāt muñcan/ dvitīyabhājanasya jalena savyakarasthakuśavittikāgragṛhītena triḥ prokṣayet/ dvitīyapratīcchake sārvakarmikakalaśajalenābhyukṣaṇe 'py evaṃ/
dvitīyabhājanasyaiva jalaṃ savyamuṣṭinā puṣpam aṅguṣṭhatarjanīsaṃdaṃsena gṛhītvācamanāya dvitīya eva pratīcchake vakṣyamāṇamantraṃ paṭhann adhomukhamuṣṭinā trir dadyāt krameṇa kaniṣṭhām anāmīṃ madhyamān tarjanīṃ ca muñ(16b)can tṛtīyasyārghabhājanasya jalādikam añjalinā gṛhītvā oṃ āḥ hrīḥ pravarasatkāraṃ arghaṃ[5] pratīccha hūṃ svāhā iti

paṭhan vajrāñjalivikāsena dadyāt trīn vārān tṛtīye pratīcchake[6] pūrvakarmatraye tv arghaṃ hitvā pādyaṃ prokṣaṇam ācamanañ ca paṭhet/

1) Ms –prokṣācanārgha–. 2) Ms *omits* ca. 3) Ms prokṣācamanabhājanañ. 4) Ms tarjanī madhyamām anāmīṅ kaniṣṭhā ka. 5) Ms pravarasatkārarghaṃ. 6) Ms pracchake.

Ms: Skt. Ms. belonging to the Tokyo University Library, No. 111, ff. 231a, 6–231b, 6; 233a, 2–233a, 8.

hemarūpyaśilātāmradārumṛnmayaśuktikaṃ
śaṅkhaḥ[1] parṇṇaputam vārghaprokṣaṇādiṣu bhājanaṃ//
sayavakṣīrakaśuklagandhādisaṃskṛtaṃ[2] jalaṃ
svāhāntena japet śāntau ātmamantreṇa mantravit//
satiladadhisanmiśraṃ[4] pītagandhādikaṃ saṃskṛtaṃ[3]
svamantreṇa japed vāri (231b) praṇavāntena pauṣṭike//
hoḥkārāntena[5] mantreṇa raktagandhādisaṃskṛtaṃ
vaśye vāri japet kṛṣṇo jaḥkārāntena saptaśaḥ//
phaṭkārāntena[6] mantreṇa sāsṛggomūtrakodravaṃ
kṛṣṇadurgandhasaṃyuktaṃ japed vāry abhicārake//
sarvatra gandhakusumadarbhalājātilānvitaṃ[7]
karmānurūpato vāri prakṣeptavyaṃ yathāptitaḥ//
arghavidhiḥ/
arghabhājanaṃ[8] tathā sarvakarmikodakabhājanaṃ[9]
sarvakarmikamantrena svamantreṇa ca mantrayet//
tadbhājanadvayaṃ vāmapārśve vinyasya vāriṇā
savyahastagṛhītena prokṣitaṃ samidhindhanaṃ[10]//
havyam anyad api dravyaṃ dakṣiṇe sthāpayet svayaṃ
māraṇoccāṭanākarṣe prokṣanyāsau viparyayāt//
niveśanavidhiḥ/

1) Ms śakhaḥ. 2) Ms –yavakṣira–. 3) Ms saskṛtaṃ. 4) Ms satīlaṃ–. 5) Ms hokārāntena. 6) Ms phaṭvārāntena. 7) Ms –darbhalāśayātilā–. 8) Ms arghabhāṇḍaṃ. 9) Ms sarvākarmikodaka–. 10) Ms samidindhanaṃ.

oṃ āḥ ruṃ arghaṃ pratīccha hūṃ ity anenārghaṃ dadyāt/arghaṃśabdasthāne pādyam ityādikaṃ prakṣipya pādyam ācamanam abhyukṣaṇañ ca datvā karmmānurūpataḥ puṣpādibhir guhyapūjādibhiś ca pūjayet/
tatredam arghādikramaḥ/
kuśaviṭṭikayā pātre prathame prokṣaṇaṃ tridhā
sarvakṛjjaptatoyena tatraivācamanaṃ sṛjet//
puṣpaṃ saṃgṛhya[1] tarjanyā kṛtvādhomukhamuṣṭikaṃ
kaniṣṭhānāmikāmadhyātarjanīḥ kramatas tyajet//
śaṃkhenārghaṃ dvitīyena dvitīye tu pratīcchake
vajrāñjalivikāśena[2] dadyāt pādyaṃ tṛtīyataḥ[3]//

tarjanyaṅguṣṭhasandaṃśā gṛhya puṣpan tu muṣṭinā[4)]
buddhānāṃ saṃmukhaṃ traidhaṃ bhrāmayed aṃguliḥ kramāt//
muñcec ca tarjanīṃ madhyamānāmāñ ca kanīyasmīm ity āmnātaḥ/

1) Ms puṣpasagṛhya. 2) Ms vajrāñjalī–. 3) Ms tṛtīyata. 4) Ms suṣṭinā.

b）チベット訳テキスト

D: Avadhūtipa dpal ldan 'gro ba'i me long, *rDo rje slob dpon gyi bya ba kun las btus pa*, The Nying ma Edition of the sDe dge bKa'-'gyur and bsTan-'gyur, Oakland, Dharma Publishing, no. 3305, vol. 61B, 1538, 4–1539, 7; vol. 62A, 115, 5–116, 3; 118, 2–118, 5.
P: _____, _____, TTP, no. 5021, vol. 86, 231, 3, 1–231, 4, 2; 303, 2, 4–303, 3, 2; 303, 5, 4–304, 1, 1.

'dir ji ltar rigs par 'chad bzhin pa'i cho ga rnams su/
gser dngul rdo dang zangs dang shing[1)]//sa byas nya phyis[2)] dung dang ni//
'dab ma'i skyong[3)] bu zhabs bsil dang//bsang gtor zhal bsil mchod yon snod//
da la snod gcig tu nas[4)] dang 'o ma dang me tog dkar po dang ku sha dang til dang 'bras yos[5)] dang bdud rtsi dang bcas pa'i dri dkar po'i chu blugs la/oṃ āḥ[6)] hūṃ zhes pa'i sngags dang/rang gi bdag po'i sngags dang 'khyil pa'i sngags rnams kyis lan bdun nam[7)] brgya rtsa brgyad du bsngags par[8)] bya ste/zhi ba'i don du'o//
rgyas pa'i don du ni til dang zho dang me tog ser po dang 'dar ba[9)] dang bdud rtsi dang bcas pa'i dri ser po'i chu blugs la de bzhin du bzlas par bya'o//
de nas rang gi g'yon logs su mchod yon gyi snod dang zhabs bsil gyi snod dang/
gsang gtor dang zhal sil gyi snod rnams[10)] gzhag par bya'o[11)]//de rnams kyi mdun du bzed zhal gyi snod 'ba' zhig[12)] pa gsum yang ngo//de la zhabs bsil gyi snod nas/khu tshur g'yas pa'i mthe bong[13)] dang 'dzub mo'i skam bas chu dang me tog 'gying ba'i tshul kyis sor mo rnams bskor zhing blangs la[14)]/'chad par[15)] 'gyur pa'i sngags kyis 'dzub mo dang gung mo dang ming med dang mthe[16)] chung rnams rim gyis dgrol zhing/snod du lan gsum[17)] dbul bar bya'o//snod gnyis pa'i chu lag pa[18)] g'yas par gnas pa'i ku sha'i chun po'i rtse mos blangs nas bzed zhal gyi snod gnyis par lan gsum bsang gtor bya ste/las thams cad pa'i bum pa'i chus[19)] bsang gtor bya ba[20)] yang de bzhin no//snod gnyis pa nyid nas g'yas pa'i khu tshur gyi mthe bong dang mdzub mo'i[21)] skam pas chu dang me tog bzung la/zhal (231, 4) bsil[22)] gyi phyir bzed zhal gnyis pa nyid du/'chad par 'gyur ba'i sngags brjod cing/ kha 'og du phyogs pa'i khu tshur gyi mthe chung[23)] dang ming med dang gung mo dang mdzub mo rnams rim gyis dgrol[24)] zhing lan gsum du dbul bar bya'o//gsum pa mchod yong gyi snod kyi chu la sogs pa[25)] rnams snyim pas[26)] bzung la/oṃ āḥ hrīḥ[27)] pravarasatkāraṃ arghaṃ pratīccha svāhā/zhes

brjod cing rdo rje thal mo kha phye bas snod gsum par lan gsum du so sor dbul[28] bar bya'o//sngar gyi las gsum la ni argyaṃ kyi gnas su pādyaṃ dang prokṣaṇaṃ dang/ācamanaṃ[29] rnams brjod par bya'o//zhes pa mchod yon la[30] sogs pa'i mtshan nyid kyi cho ga'o//

1) D gser dang dngul dang zangs dang rdo dang shing. 2) D sa bya bya lcibs. 3) D kyong. 4) P gcig du gnas. 5) P 'bras yongs. 6) P aḥ. 7) P nams. 8) P pa. 9) D durva. 10) D zhal gsil gyi snod dang gsang gtor gyi snod rnams. 11) P bya zhing. 12) P 'ba' shig. 13) P mthe po. 14) D skam bas 'gying ba'i tshul kyis so rnams bskor zhing chu dang me tog blang la; P skabs chu dang me tog 'gyid pa'i tshul kyis sor mo rnams bskor zhing blangs la. 15) P pa. 16) D mthe'u. 17) P gsus. 18) P par. 19) D chus yis. 20) D bya te. 21) D khu tshur gyi mthe bong dang mdzub mo'i; P khur tshur gyi mthe pong dang 'dzub mo'i. 22) P zhabs bsil. 23) D gyis mthe chung; P gyi mthe bong chung. 24) P 'dzub mo rnams rims kyis dkrol. 25) P las sogs pa'i. 26) D snim par; P snyims pas. 27) P hri. 28) P dphul. 29) D āñcamanam. 30) P las.

gser dngul rdo dang zangs dang shing//sa[1] byas nya phyis dung dang ni//
'dab ma'i kyong bu zhabs bsil dang//bsang gtor zhal bsil mchod yon snod//
zhi bar der gnas 'o ma dang//dkar po'i dri sogs 'dus byas te//
sngags rig bdag nyid sngags pa yis//chu la svāhā'i mtha' can bzlas//
rgyas par der ni til zho bsres[2]//ser po'i dri sogs 'dus byas te//
chu la oṃ yig mtha' can te//rang gi sngags kyi[3] bzlas pa bya//
dbang la dmar po'i dri la sogs//'dus bya chu la hoḥ yig ge//
mtha' can sngags kyi bzlas pa bya//dgug par jaḥ yig mtha' can bdun//
mngon spyod la ni khrag dang bcas//ba lang chu dang ko ḍa pa[4]//
nag dang ngan pa'i dri sogs ldan//chu la phaṭ mtha'i sngags bzlas bya//
kun du dri dang me tog dang//ku sha 'bras yos til dang ldan//
las dang rjes mthun chu la ni//ji ltar rnyed pa rab tu gzhag//
mchod yon snod dang de bzhin du//las kun pa yi chu yi snod//
las kun pa yi sngags dang[5] ni//(303, 3) rang gi sngags kyis bsngags par bya//
padma'i snod gnyis g'yon logs su//rnam par bkod par gyur pa'i chu//
lag pa g'yas pas bzung[6] ba yis//yam shing sogs la bsang gtor bya//
bsreg par bya ba'i rdzas rnams gzhan//rang gi g'yas su gzhag bya ste//
bsad dang bskrad dang dgug pa la//bsang gtor dgod pa bzlog ste bya//

1) D sas. 2) P bsre. 3) P kyis. 4) P ko ta ba. 5) D *omits* dang. 6) P g'yas pa gzung.

de nas oṃ āḥ hūṃ arghaṃ pratīccha hūṃ zhes pa 'dis mchod yon dbul zhing arghaṃ gyi sgra'i gnas su pādyaṃ[1] zhes pa la sogs pa bcug pas zhabs bsil dang zhal bsil dang/bsang gtor rnams kyang phul nas las dang rjes su mthun pa'i me tog la sogs pa rnams dang gsang ba'i mchod pas kyang mchod par bya'o//de la 'di'i mchod yon la sogs pa'i rim pa ni/
ku sha yi[2] ni chun po yis//dang po'i snod du bsang gtor gsum//
kun du bz[as byas chu yis ni[3]//de nyid du ni zhal bsil[4] dbul//

khu tshur 'og tu phyogs pa yi//mdzub mos me tog gzung byas nas//
mthe chung ming med gung mo dang//mdzub mo rim gyis bkrol bas so//
gnyis pa dung gi mchod yon te//gnyis pa nyid du so sor dbul//
rdo rje[5] snyim pa phye bas so//gsum par zhabs bsil[6] dbul bya ste//
khu tshur mdzub mo mthe bong gi//skam pas gsung ba'i me tog rnams//
sang rgyas rnams kyi spyan snga ru//sor mo rim gyis lan gsum bskor//(304, 1)
mdzub mo gung mo ming med dang//mthe[7] chung rnams ni bkrol[8] bas so//
zhes pa ni man ngag go//

1) P padyam. 2) P yis. 3) P de. 4) D zhabs bsil. 5) P snying rje. 6) D zhal bsil. 7) P mthe'u. 8) P dkrol.

4) ツォンカパ・ロサン・タクパ著『真言道次第』第7章チベット語テキスト（部分）

G: Tsong kha pa blo bzang grags pa, *rGyal ba khyab bdag rdo rje 'chang chen po'i lam gyi rim pa, gSang ba kun gyi gnod rnam par phye ba*, The Collected Works (gSuṅ 'Bum) of rJe Tsoṅ-kha-pa Blo-bzaṅ-grags pa, reproduced from an example of the old Bkra-śis-lhuṅ-po redaction from the library of Klu 'Khyil monastery of Ladack by Ngawang Geleg Demo, vol. 4, Gedan Sungrab Minyam Gyunphel Series, vol. 82, New Delhi, 1975, 486, 5–489, 3.
P: _____, _____, TTP, no 6210, vol. 161, 138, 2, 7–138, 5, 1.

gnyis pa ni/mchod yon la sogs pa'i snod ni/
gser dngul rdo dang zangs dang shing//sa byas nya phyis dung dang ni//
'dab ma'i skyong bu zhabs bsil dang//bsang gtor zhal bsil mchod yon snod//
de dang snod gzhan gang rung du/
zhes dngos su smos pa dgu dang gzhan yang rung ngo//'di rnams spyi rgyud las mchod yon gyi snod du bshad kyang[1] chu gzhan (138, 3) rnams kyi'ang snod yin te/
mi thub zla bas/
'di kun mchod yon yan lag phyir//mchod yon sgra ru bshad pa yin[2]//
zhes gsungs pa ltar ro//
nang rdzas dang sngags ni/nas dang 'o ma dang me tog dkar po dang ku sha dang til dang 'bras yos dang bdud rtsi dang bcas pa'i dri dkar po'i chu rnams blugs la/oṃ āḥ hūṃ zhes pa dang rang gi bdag po'i sngags dang 'khyil pa'i sngags kyis lan bdun nam brgya rtsa brgyad du bsngag par bya ste zhi ba'i don du'o//de dag ni/mchod yon gyi rdzas bdun du grags pa'o//rgyas pa'i don du til dang zho dang me tog ser po dang ku sha dang dri ser po'i chu bdud rtsi dang bcas pa blugs la de ltar bzlas pa bya'o//spyi rgyud las/
de nas dri zhim chu blugs nas//blo ldan lag gis bran bya zhing//
bdug spos kyis ni bdug bzhin du//yid kyis rab tu bzlas brjod bya[3]//
zhes so//
gang du 'god pa'i tshul ni/de nas rang gi g'yon du mchod yon dang zhabs bsil dang bsang gtor dang zhal bsil gyi snod bzhag cing de dag gi mdun du'ang

bzed zhal gyi snod stong pa gsum gzhag[4] go//mi thub zla bas/
me tog spos dang mar me dang//dri yi dung sogs g'yas su bzhag//
g'yon du sngags kyi mchod yon snod//mdun du yang ni snod gzhag[5] bya[6]//
zhes gsungs te bzed zhal rnams mañji'i khar gzhag[7] par bshad do//
'bul ba'i phyag rgya dang sngags ni khu tshur g'yas pa'i mthe bong dang mdzub mo'i skam pas zhabs bsil gyi snod kyi chu dang me tog 'gying ba'i tshul gyis sor mo (138, 4) rnams bskor zhing blangs la/mdzub mo nas rim pa bzhin du phye ste/
oṃ āḥ hūṃ pravarasadkāraṃ pādyaṃ pratīccha hūṃ svāhā/zhes brjod cing bzed zhal du dbul lo//snod gnyis pa'i chu lag pa g'yas pas bzungs[8] ba'i ku sha'i rtse mos blangs te pādyaṃ kyi gnas su/prokṣaṇam bcug nas bzed zhal gnyis par bsang gtor lan gsum bya ste las bum gyi chus bsang ba la yang de bzhin no//snod gnyis pa'i chu me tog dang bcas pa g'yas pa'i mtheb mdzub kyis bzungs[9] la kha 'og tu phyogs pa'i mthe'u chung nas rim gyis dgrol zhing ācamanam[10] bcug pa'i sngags brjod nas bzed zhal gnyis pa nyid du dbul lo//
gsum pa mchod yon gyi snod chu la sogs pa dang bcas pa snyim pas bzungs[11] la/arghaṃ bcug[12] pa'i sngags brjod cing rdo rje thal mo phye bas bzed zhal gyi[13] snod gsum par dbul te thams cad la lan gsum gsum mo//
de ltar na chu bzhi la ni snod gsum ste bsang gtor dang zhal bsil gyi snod gcig pa'i phyir ro//
'bul ba'i go rim[14] ni/sngar bshad pa ltar chu bzhi 'bul ba'i rim pa 'di ni phal cher las mthong ngo//gzhung kha cig tu ni/sngar bshad pa las gzhan du 'byung la bsang gtor ni/ji ltar rigs par bya'o//gzhung kha cig tu ni/dang por mchod yon 'bul ba yod la kha cig tu chu gzhan gsum med par mchod yon 'bul ba kho na bshad de skabs ji ltar rigs par bya'o//
gnas gang du 'bul ba ni/zhabs bsil ni/zhabs bkru bas zhabs la 'bul bar msam mo//de bzhin du bsang gtor ni/sku thams cad la dang zhal bsil ni phyag gam zhal du dang mchod yon ni mdun nam dbu la dang/me tog ni dbu dang spos dang mar me ni mdun dang lha bshos ni/mdun nam phyag gam zhal du dang/dri ni thugs kar 'bul bar (138, 5) bsam ste de lta bu ni/cho ga thams cad du shes par bya'o//

1) Cf. *Sarvavidhisāmānyavidhi guhyatantra*, TTP, no. 429, vol. 9, 46, 1, 3; 47, 5, 3f. 2) Cf. Durjayacandra, *Suparigraha-nāma-maṇḍalopāyikāvidhi*, TTP, no. 2369, vol. 56, 143, 4, 3. 3) Cf. *Sarvavidhisāmānyavidhi guhyatantra*, TTP, no. 429, vol. 9, 46, 1, 4. 4) P bzhag. 5) P bzhag. 6) Cf. Durjayacandra, TTP, no. 2369, vol. 56, 143, 3, 6. 7) P bzhag. 8) P bzung. 9) P bzung. 10) G āñcamanam. 11) P bzung. 12) P btsug. 13) P gyis. 14) G rims.